

歴史資料でよむ久喜市ゆかりの人物ブックレット ①

# 中島撫山の生涯

Nakajima

Buzan

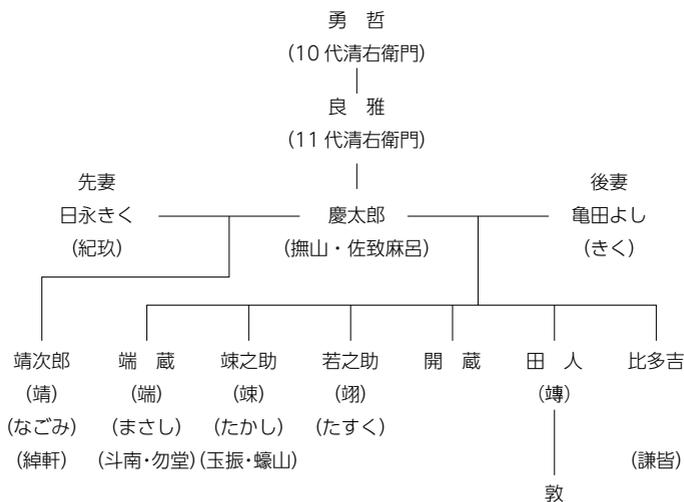
監修 早稲田大学名誉教授 村山吉廣

Murayama Yoshihiro



久喜市教育委員会

中島撫山関係系図



凡例

- 1 本書は、市ゆかりの人物に関する基本文献に相当する関係資料をまとめ、それらの関係資料を基礎にして、当該人物の叙述を試みたものです。
- 2 本書は、原則として三部構成になっています。
  - ① 当該人物の概要が理解できるように平易に叙述した専門家の寄稿文
  - ② 当該人物に関する関係資料を現代的な言葉で意識した現代語訳
  - ③ 当該人物に関する関係資料の本文（原漢文については訓読体で表記）
- 3 本書は、久喜市ゆかりの人物に関する一般的な読み物と、当該人物に関する基本文献に相当する関係資料を整理した資料集に相当するものです。
- 4 本書の刊行に当たり、次の方々にご協力をいただきました。ここに記してお礼申し上げます（敬称略）。  
榎本善之助、久喜市公文書館、久喜市立郷土資料館、久喜・中島敦の会、光明寺、小林晴夫、嶋田実、中島甲臣、中島静、中島桓、鷲宮神社
- 5 本書内の「中島甲臣家古文書」「中島桓家古文書」「中島元夫家古文書」は、久喜市公文書館で所蔵し、一般の利用に供されているものです。

表紙

中島撫山肖像(中島桓氏蔵)

原写真は、長男靖が亡くなった明治39年6月頃の一族の集合写真と伝えられているもの（『写真資料 中島敦』110頁参照）。この肖像は、その集合写真から撫山の部分だけをトリミングして作成したものです。

## ❖ 目 次 ❖

1	寄稿「中島撫山の生涯」	1
	江戸の商家に生まれて .....	1
	久喜に移り住むまで .....	4
	幸魂教舎の教育 .....	7
	撫山はどんな学者だったのか .....	11
	撫山漢詩の世界 .....	15
	その後の撫山中島家 .....	19
2	関係資料 解題 .....	24
3	関係資料（現代語訳）	
	一 阪井弁『明治畸人伝』所収の「中島撫山」 .....	25
	二 中島隴臣撰文「中島撫山墓誌銘」 .....	29
	三 『史学雑誌』第三十二編第八号所収の故中島慶太郎 「天平文書田税物價諸表（其一）」に付した著者略歴 .....	29
	四 中島竦編『演孔堂詩文 下巻』所収の 中島竦撰文「演孔堂詩文跋文」 .....	30
	五 故中島撫山著『性説疏義 下冊』所収の 中島竦撰文「性説疏義跋文」 .....	32
	六 中島竦作製『撫山中島先生略年譜』 .....	34
	七 中島田人撰文「撫山中島先生終焉之地」碑 .....	43
	八 『書苑』第六卷第四号所収の中島慶著・中島竦増訂 「増訂龜田三先生傳實私記（其一）」に付した著者略歴 .....	44
4	関係略年表 .....	45
5	関係資料（本文）	
	写真（演孔堂詩文跋文・性説疏義跋文） .....	46
	一 阪井弁『明治畸人伝』所収の「中島撫山」 .....	47
	二 中島隴臣撰文「中島撫山墓誌銘」 .....	50
	三 『史学雑誌』第三十二編第八号所収の故中島慶太郎 「天平文書田税物價諸表（其一）」に付した著者略歴 .....	50
	四 中島竦編『演孔堂詩文 下巻』所収の 中島竦撰文「演孔堂詩文跋文」 .....	51
	五 故中島撫山著『性説疏義 下冊』所収の 中島竦撰文「性説疏義跋文」 .....	52
	六 中島竦作製『撫山中島先生略年譜』 .....	54
	七 中島田人撰文「撫山中島先生終焉之地」碑 .....	61
	八 『書苑』第六卷第四号所収の中島慶著・中島竦増訂 「増訂龜田三先生傳實私記（其一）」に付した著者略歴 .....	62
6	主な参考文献 .....	63



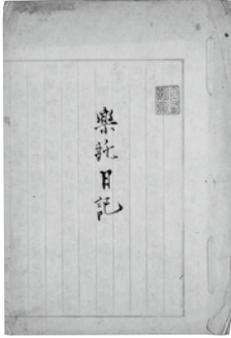
中島慶太郎の住所等(中島元夫家古文書№2244)

明治5年に久喜本町に戸籍を編製するに際し、撫山自身が作った案文と考えられているものの一部。ただし、それ以後の情報も部分的に加筆あり。

## 江戸の商家に生まれて

幸魂こうこん教舎きょうしやを開いて沢山の人々に漢学を教授した中島撫山なかじまぶざんは、もとは久喜の人ではありません。生家は、当時江戸と呼ばれた東京の日本橋新乗物町にほんばししんのりものちやうにありました。現在の中央区日本橋堀留町二丁目あたりです。家業は乗物師のりものしで、当時の交通手段だった駕籠かごを製造し、これを商あきなうものでした。駕籠にも庶民の使う簡単な辻籠つじかごから大名籠だいにみょうかごのような立派なものまでありましたが、中島家は御乗物師おんのりものし・中嶋屋清右衛門せいゑもんと名乗り、代々武家や大名家に駕籠を納めるのを業ぎやうとして栄えていました。撫山の父は良雅りやうと言ひ、十一代目に当たり、撫山はその長男です。生まれたのは文政十二年ぶんせいじふにねん(一八二九)四月十二日で、時の將軍は十一代家齊いえなりでした。

撫山の名は慶太郎けいたろう。母は十一歳の時に亡くなっています。天保十三年てんぽうじふさん(一八四二)、十四歳の時に千住せんじゆ(現・足立区千住)にいた医師で漢学を教えていた出井貞順いでいじゆんの塾に入り漢学の手ほどきを受けていま



『楽託日記』（中島元夫家古文書No.2107）

安政4年8月22日から9月12日までにかけて、江戸から日光までを往復した旅の記録。この旅は、家業を棄て学問で独立するという、29歳の時の撫山の覚悟を示したものとして貴重。

す。撫山が学問好きで利発だったので、貞順は間もなく撫山を自分の師である亀田綾瀬の塾に入らせることにしました。綾瀬は、文化・文政時代に漢学者としても文人としても江戸の人々に高い人気であった亀田鵬斎の嗣子でした。すでに綾瀬は晩年でもあったので、撫山は綾瀬の養子の鶯谷に教えを受けることにもなります。

弘化二年（一八四五）、十七歳となった撫山は元服します。師の鶯谷は撫山に伯章という字を贈ります。二年後の弘化四年に父の良雅が四十歳で亡くなってしまいました。十九歳となった撫山は、長男としての立場上、当然家業を継がなくてはなりません。綾瀬・鶯谷両先生に就いて学問に励んでいるうちに学問への志向が強くなり、家業を継ぐ気持ちがなくなっていました。当時の習慣として、商人が大名家などに物品を納入する時には、相手方の役人に接待をしたり金品を贈ったりすることが一般的でした。潔癖な撫山にはこういうことも気のすまない理由だったとされています。そこで撫山は、安政四年（一八五七）、ゆかりのある中嶋屋を別の名義人にゆずり、



扁額「演孔堂」

（中島元夫家古文書）

撫山の師にあたる亀田鶯谷の書。紙に書かれている。

家を出て町の儒者となる道を選び、塾を開いて両国矢ノ倉（現・中央区東日本橋）に住むことにしました。塾の名は演孔堂。師の鶯谷が学孔堂ですから、その精神を引き継ぎ、「孔子の道を推し広めよう」という意気込みをあらわしています。このころは、言うまでもなく世は幕末で明治維新まであと十年、安政の大獄、天狗党の乱などが相次ぎ、江戸市中にはコレラも流行して世間は騒然としていました。

しかもせっかく矢ノ倉に開塾したのもつかのま、二年後には同じ師に学んで親しくしていた先輩の新井稲亭という人が亡くなってしまいました。稲亭は神田お玉が池（現・千代田区岩本町）という所で塾を開いていましたが、師を失ったその門人から、撫山にこの塾に移って自分たちを指導してくれるようにという強い要請がありました。このため情誼に篤い撫山は、間もなく矢ノ倉を去ってお玉が池に移ります。ここは当時江戸の有名な文教地区として、梁川星巖の玉池吟社、佐久間象山の玉池書院（象山書院）、更には北辰一刀流の千葉周作の玄武館などがある所でした。亡くなった稲亭の名は豊、武州鹿



中島きく (中島桓氏蔵)

本名は、亀田よし。信州須坂藩士族の出身。安政2年10月の大地震で先妻の紀玖が亡くなった後に、後添えとして中島家に入ったことから、以降は「きく」を名乗ったと伝えられている。天保7年生。大正13年没。

室(現・さいたま市岩槻区鹿室)の出身です。これがのちの撫山と埼玉とのつながりのはじまりとなります。

## 久喜に移り住むまで

三百年つづいた徳川幕府が倒れる寸前の慶応二年(一八六六)に、稲亭の遺児で鹿室に塾を開いていた桐蔭が若くして亡くなってしまいます。もともと桐蔭は撫山と親しく、兄事していましたから桐蔭の門人たちは撫山に鹿室に来て自分たちにも講義をしてほしいと依頼して来ました。撫山はこの時もこの地の人々の願いを入れるとともに、その後もくり返し鹿室を訪れるようになりました。こうしているうちに幕府が倒れ、年号も明治と改まりました。この年(一八六八)撫山は四十歳となっています。江戸は東京とよばれるようになりましたが、市中は時代の交代で混乱していました。孔子を祀った湯島の聖堂で孔子を外へ出られなくすると言って孔子廟に乱暴にも矢



大作桃塙（『文蔚堂詩文鈔』・個人蔵）

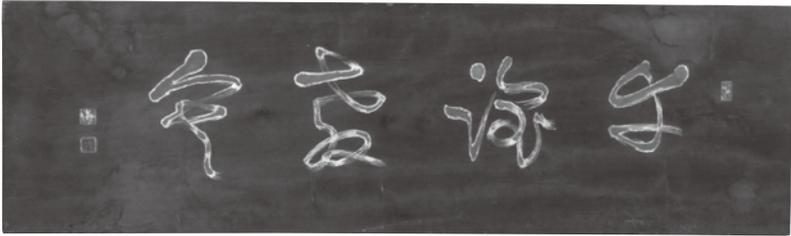
新井稲亭・桐蔭親子の高弟で、撫山と埼玉とを結びつけた人物の一人。明治45年に『文蔚堂（ぶんうつどう）詩文鈔』を刊行。天保2年生、大正9年没。

を設けたり、書庫の典籍てんせきを持ち出して近くの神田川かんだがわに棄てたりする者さえ現れました。いわゆる「旧物破壊きゅうぶつはかい」です。騒がしいことの嫌いな撫山は次第にこの東京にすることに嫌悪感を覚えるようになりました。そこで鹿室に行く時には、更にその近くの大場村おおばむら（現・春日部市し大場）の大垣家おおがきや本郷村ほんごうむら（現・杉戸町すぎとまち本郷）の大作桃塙おおさくとうの邸にも泊まり、何日間か土地の人々に漢籍の講義をしたりして過ごすこともありました。こうして、次第に撫山とこのあたりの人々との縁縁が深くなっています。

そのころ、大場や本郷ともあまり離れていない久喜町くきまち（現・久喜市）の人々の間に、撫山先生を町に呼んで住んでもらおうという動きが始まりました。もともと久喜には享和三年きやうわ（一八〇三）設立の遷善館せんぜんかんという郷校ごうこうがありました。当時、民政に尽力して「寛政かんせいの三代官」の一人に数えられた早川正紀はやかわまさとしが代官として赴任し、土地の有力者と相談して庶民教育のために設立した学校です。遷善館では江戸から立派な学者を招いて教授としましたが、そのなかを選ばれたのが撫山

扁額「幸魂教舎」（中島甲臣家古文書No1）

撫山の師にあたる亀田鶯谷の書。木に彫られている。



の師の家の亀田鵬齋ほうさいであり、その子の綾瀬りょうせでした。幕末にはすでに遷善館はなくなっていました。そこで教えを受けた人々の子孫が少なからずいました。この人々は鵬齋・綾瀬につながり、綾瀬のあとの鶯谷おうこくの有力な弟子である撫山こそ来てもらうのに最もふさわしい学者だと考えたわけです。撫山も、遷善館の遺風が残り、このように熱心な人々のいる土地に迎えられることを喜び心強く思っていました。このようにして、明治初年、撫山の久喜来住が決定していくことになりました。撫山を招く運動の中心になっていたのは宮内氏・内田氏・榎本氏・野原氏・田中氏などいずれも土地の有力者で、住居なども提供されることになりました。

明治五年（一八七二）、戸籍令こせきれいが定まると、撫山は久喜本町くきほんまちに戸籍を定め、翌年八月には久喜本町の私宅に「幸魂教舎こうこんきょうしや」を設けました。「幸魂」とは武州の古名「幸つ御魂さきつみたま」「幸魂さきたま」に基づくもので、呼び方は「こうこん」とも「さきたま」ともしていました。

なお、撫山の久喜来住の動機の一つとなった遷善館には、文化五



拓本「新建久喜遷善館記」碑陽(小林晴夫氏蔵)

撫山の師筋にあたる亀田鵬斎の撰文で、筆も鵬斎自身によるもの。碑陰には、建碑関係者の名前が刻まれていた。

年(一八〇八)に建てられた「新建久喜遷善館記」の石碑がありました。撰文は亀田鵬斎で、館の建てられた次第が漢文体で述べられていて、刻まれた文字も書で名高い鵬斎の手によるものでしたが、残念ながら明治十一年(一八七八)の久喜の大火で焼けて崩れおちてしまいました。現在、市の公文書館の入口に設置をされているものは当時の拓本をもとにして復元したものです。

### 幸魂教舎の教育

幸魂教舎でどのような講義が行われていたかについては久喜市本町一丁目の斎藤家から出た文書に次のようにあります。

一日	午後	毛詩 <small>もうし</small>	二之日	同	中庸 <small>ちゆうよう</small>
三之日	同	周易 <small>しやくぎ</small>	四九日	午前	論語 <small>ろんご</small>
六之日	同	孟子 <small>もうし</small>	七之日	同	万葉 <small>まんよう</small>
八之日	同	韓文 <small>かんぶん</small>	五之日	同	古事記 <small>こじき</small>
					詩文会 <small>しぶんかい</small>



「名簿」「及門生名氏録」  
「入門生氏名籍」

(中島元夫家古文書No2108～No2110)

中島家に残されていた3冊の入門帳は、おおよそ「明治14年まで」「明治14年12月～明治18年」「明治17年～明治30年」の3期に分冊されている。

十之日 休日

「一日」というのは一日、十一日、二十一日、三十一日のことです。これによると、十日、二十日、三十日は休みで、ほかの日は課業があります。毛詩・周易は五経という中国古典のなかの『詩経』『易経』のことで、『中庸』『論語』『孟子』は四書とよばれる儒教の重要な古典です。教育の基本は、このように従来日本でも重視されてきた儒教の古典、すなわち漢籍を読むことを重んじました。ほかに「韓文」がありますが、これは唐の文人韓愈の文章のことで、漢文を読む力と漢文を綴る漢作文の勉強のための教材です。教科にはこのほか『万葉集』と『古事記』があり、日本の古典も学びました。また「五日」には詩文会があり、塾生は自分の作った漢文・漢詩を提出して先生に直してもらうことができました。

撫山は亀田鵬斎の学統を継ぎ、江戸でも知られた学者でしたので、地元の人々の信望も厚く、開塾すると久喜周辺の人々が次々と入門しました。現在残されている入門帳によると、入門者は久喜を中心

## 久喜駅停車場敷設に奔走した人々

（榎本善之助氏蔵）

明治17年の久喜駅停車場の敷設に奔走した吉田元輔、榎本謙次郎、野原吉兵衛、長谷川喜吉などは、幸魂教舎の門生。野原新兵衛は、撫山の久喜本町宅の土地を提供した人物。



に、現在の北埼玉郡、南埼玉郡、北葛飾郡にわたり、県外では茨城、栃木、千葉県の関宿せきやどから来る人もいました。関宿は旧藩時代に師の鶯谷が藩の儒者となっていて、撫山も師の代講でしばしば関宿に赴いていたので門下の人も少なくなかったからです。

明治九年（一八七六）、撫山は四十八歳となりましたが、入門者が多いので夏に一室を増築しています。当時はすでに「国民皆教育」の名の下に全国に小学校が建てられ公教育が施行され、従来の寺子屋しじゆくや私塾には政府から圧迫も加えられていました。しかし、地元では撫山の幸魂教舎の人氣が高く、住民はここを「中島学校」と言って親しみ、たとえ公教育を受けていても中島学校に行っていないと重んじられなかったと伝えられています。中島学校には「幸魂教舎」と書いた置き傘があり、雨の日にはこの傘をさした若者が町中を往来する姿がよく見られたという当時の様子も伝えられています。細面ほそおもてで眼光がんこうするどく、髪は、はじめは総髪そうはつ、のちには結髪けつはつに変わりました。白く長いひげがあり、一見して江戸時代の儒者をまのあたりに見る



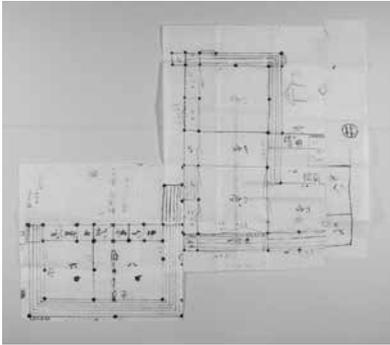
宮内翁助（嶋田実氏蔵）

撫山の弟子。撫山の次男で初代明倫館館長となる端蔵と教育の充実で意気投合し、埼玉県会議員を辞職した後に私立明倫館を設立する。その後衆議院議員となる。嘉永6年生。大正元年没。

思いがします。塾生への訓育には熱心であると共に、自分自身の研  
学にもつねに努力をしていました。政府が旧式の私塾を排除しよう  
としていた時代に地域の人々から支持され、明治の末に亡くなるま  
で四十年近くも久喜の地で教舎を維持して来たのは立派なことで  
す。門下で知名となった人々を任意に挙げると次のようになります。

宮内翁助（県会議員、衆議院議員、私立明倫館創設者）、吉田  
元輔（県会議員）、新井鬼司（同上）、内田立輔（県会議員、清  
久村長）、高木亮助（同上）、新井門之助（県会議員、水深村長）、  
榎本謙次郎（久喜町長）、杉村常右衛門（同上）、野原吉太郎  
（同上）、田中純治（太田村長）、奥貫喜市（江面村長）、真田陸  
三郎（清久村長）、中山正一（大桑村長）、石井参四郎（水深村  
長）、角田美之輔（同上）、野中広助（埼玉酒造株式会社専務取  
締役）、角田（のちに田沼）勝之助（日本製銅社社長・私立横浜  
高等女学校理事長）。

このように、撫山及び辛魂教舎が地方文化培養に尽くした功績は



久喜新町宅平面図(中島元夫家古文書No.2879)

明治42年に久喜本町から久喜新町に転居することを、当時北京に在住していた三男竦之助(しょうのすけ)に知らせた手紙に同封されていたもの。

偉大です。なお、教舎及び居宅は明治四十二年秋に本町ほんまちから新町しんまちに移りました。その時、建物はローラーにのせられて町中を移動したとのことです。この建物は平成十年になくなってしまいました。敷地内にはいまでも「撫山中島先生終焉之地」の碑が建っています。没後三十年祭のもので、撫山の六男たびと田人の撰文せんぶんによるものです。

### 撫山はどんな学者だったのか

撫山がくせの学祖がくそに当たる亀田鵬斎せうさいは、折衷学せつちゅうがくを唱え、幕府公認の朱子学にも同調しませんでした。そのため文人に徹し、酒と旅と詩で後半生を過ごし、豪快さで江戸市中の人気の高い人でした。「詩書画三絶さんぜつ」の名があり、詩と共にその書や画も大いにもてはやされました。嗣子きしの綾瀬あやせは父とちがって謹直きんちよくな学者でした。その養子となつたのが鶯谷うらやで、現在の茨城県結城郡八千代町やちよまちの生まれです。鶯谷もすぐれた学者で、亀田家は三代学者がつづき「亀田三先生」とよばれ



「性説疏義」稿本

（中島元夫家古文書No2099～No2100）

撫山が長男靖に与えたもので、増永茂十郎と吉田忠太郎が中心になって出版した『性説疏義』の写真製版の基になった稿本。

ました。現在、同町東路田の鶯谷の生家鈴木家には亀田三先生の顕彰碑が建っています。鶯谷の学問は二先生と少し異なり、漢学と国学とを折衷した「皇漢学」というものでした。撫山は鶯谷の第一の高弟であり、その学問も忠実に受け継いでいます。幸魂教會で、漢学のほかに『万葉集』や『古事記』を講義していたのはそのためです。従って撫山の学風は朱子学のようなかたくななところがなく、国学のもつおおらかさも少し加わっています。ただ詩や文章は、師の鶯谷の好みを反映して唐の韓愈の詩文を慕っていましたから、古めかしく難解な所がありました。

著作にはまず『性説疏義』があります。これは鵬齋の論説「性説」に解釈を加えたもので、人の持つて生まれた「本性」とはどういうものかという儒教の根本にある問題に新しい解釈を加えようとしたものです。この本は写本のまま伝わりましたが、昭和十年（一九三五）に写真製版されて出版されました。

次に『日文章篆考』があります。これは写本のままで伝えられ、出



「日文章篆考 完」（中島元夫家古文書No.2102）

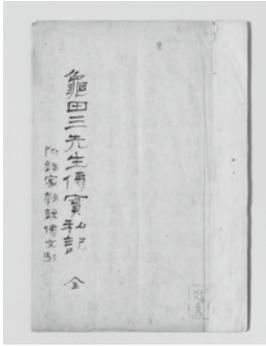
日文（ひふみ）と呼ばれる神代文字の草書体と篆書体（てんしよたい）とが、同一の起源から発生していることを説き明かしたもの。

版されてはいません。「日文」とは神代文字のことで、一部の国学者が漢字伝来以前に日本にあったとする文字のことです。撫山のもつ尚古主義のあらわれです。

『古事記序解』も国学系の著述で、明治九年（一八七六）に一三三社から刊行され、撫山が編集人になっていますが、師の鶯谷の口授したのを筆記したものです。『古事記』の「序」について考証したもので、学術上に価値のある内容とされています。

『亀田三先生伝実私記』は亀田鵬斎・綾瀬・鶯谷三先生の伝記ですが、鵬斎について詳しく、ほかの二人の伝は簡略です。鵬斎伝としては貴重なもので、写本で何人かの筆写したものが伝わっていたのですが、昭和十七年（一九四二）に、撫山の三男の玉振が更に考証を加え、増訂したものの一部（鵬斎伝のみ）を活字にして雑誌に連載しています。

生前、撫山の作った漢文の作品や詩は、没後の昭和六年（一九三一）に『演孔堂詩文』としてまとめられ、線装の活字本として刊行されま



「龜田三先生伝実私記 全 附諸家雑説(文駁)」

(中島元夫家古文書No.2446)

亀田鵬斎・綾瀬・鶯谷の三先生の伝記。鵬斎生誕の地とされる群馬県邑楽郡(おうらくん)上五箇村(かみごかむら)の依頼で、明治22年に撫山が執筆したもの。

した。私たちはこれによって撫山の詩文の世界を知ることがができます。なお、撫山が人に書いて与えた書画は、久喜・白岡をはじめ周辺の地区の家々にも伝えられていて、それにより撫山の学芸や人となりを身近に知ることもできます。詩文は唐の韓愈を慕っていましたので、難字も使われていてややわかりにくいところもあります。書体は細目の隷書体(れいしよた)を好み、画は鵬斎風の文人画(ぶんじんが)です。撫山は生前人々の依頼により多くの碑文(ひぶん)や墓表(ぼひょう)を書いていて、幸いにして現在でも近在はもとより広く各地に残っています。それによってその人柄も書風も知ることがができます。そのいくつかを挙げてみると次のようになります。

雪斎(せつさい)高木翁(たかきおん)勤家碑(きんか) (久喜市下清久)、小林君墓銘(こばやしきみ) (久喜市菖蒲町三箇(ちやうさん)・長龍寺(ちやうりゆうじ))、報徳祈寿(ほうとくしゆ)・渡邊周軒(わたなべしゅうけん)の碑(ひ) (久喜市河原代(かわらだい))、千勝神社(ちかつ)報徳碑(ほうとく) (久喜市中妻(なかつま)・千勝神社(ちかつ))、柴山(しばやま)伏越(ふせこし)改造碑(かいぞう) (白岡市(しろおか)柴山(しばやま))、江原(えはら)寛行(かんぎやう)超俗碑(しやうよく) (白岡市(しろおか)荒井(あらい)新田(しんでん))、逸見(えんみ)先生(せんせい)遺劍藏銘(いけんざう)并序(ならびに) (春日部市(かすかべ)藤塚(ふじづか))、武田(たけだ)翁(おん)碑(ひ) (茨城(いばらき)県(けん)結城(むすし)郡(ぐん)八千代(やちやう))



『演孔堂詩文』

(中島元夫家古文書No3549)

24頁の「関係資料 解題」4参照。

町東落田）、春汀先生墓銘（栃木県栃木市旭町・満願寺）、日野井碑（長野県中野市小館・高梨氏館跡）、淡水中島翁衣幘藏碑（長野県須坂市常磐町・奥田神社）。

なお、撫山の師鶯谷が幕末に須坂藩に出講して、撫山も代講で同地に赴いてもいるので、須坂の人々との交わりも浅くなく、後添えも須坂の出身でした。長野県にいくつかの碑文があるのはそのためです。

撫山漢詩の世界

残された漢詩によって、撫山の日頃の信条や生活の一端を知ることができません。

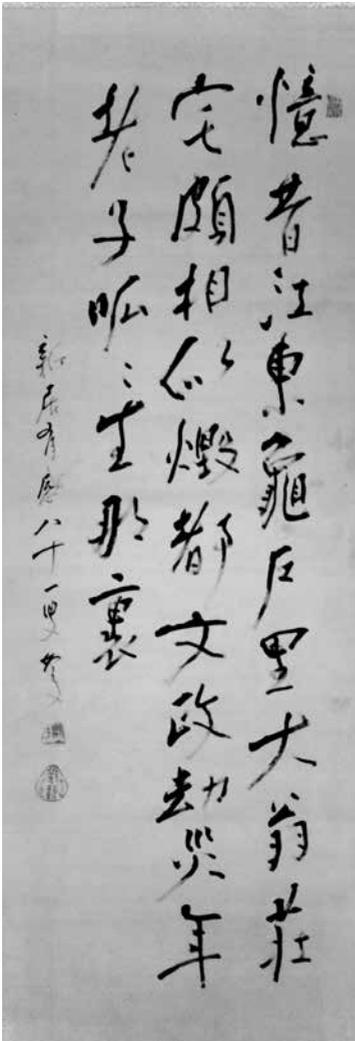
癸卯新年

七十五年強項儒

謳春浴例酌屠蘇

七十五年強項の儒

春を謳ひ例に浴ひて屠蘇を酌む



中島撫山書「新居有感」（中島桓家古文書No4）

明治42年に久喜本町から久喜新町に転居した際に、撫山が詠んだ漢詩の一首。「演孔堂詩文」にも、「移居有感」という題で採録されている。

斯文不墜伝家有

斯文墜さず家に伝ふるあり

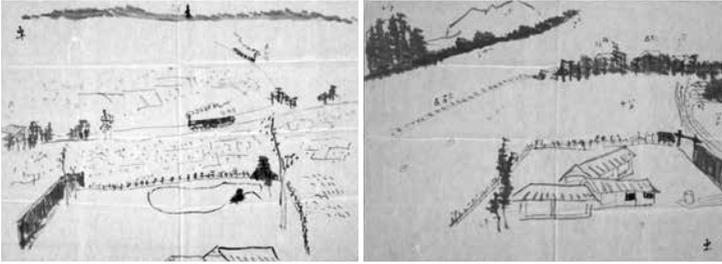
自許六経坦遁夫

自ら許す六経の坦遁夫

明治三十六年（一九〇三）正月、七十五歳の時の作です。「強項の儒」とは頑固な儒者。第二句は今年も例年と同じく屠蘇を祝ったということ。第三句は「斯文」すなわち儒学を守りつづけていること。第四句は今も孔子の道を後世に伝える者として努力をつづけているということを行っています。

〔久喜新町宅周辺図〕（中島元夫家古文書No2812）

明治42年に久喜本町から久喜新町に転居した際に、当時北京に在住していた三男 竦之助に知らせた手紙に同封されていたもの。



移居有感

居を移して感あり

憶昔江東亀戸里

憶ふ昔江東亀戸の里

大翁莊宅頗相似

大翁の莊宅頗ぶる相似たり

燬都文政劫災年

都を燬く文政劫災の年

老子呱呱生那裏

老子呱呱として那裏に生れしを

明治四十二年、撫山が新町に移り住んだ時の詩です。

文政十二年（一八二九）三月、江戸下町が全焼する大火がありました

た。新乗物町中島家も罹災し一家は亀戸にあった大祖父（大翁）の隠

居所（莊宅）に移っていました。翌月に撫山はここで生まれています。

「那裏」とは「そこで」の意です。この亀戸の別宅が、どうやらいま移っ

て来た久喜新町の家と似た雰囲気があると、遠い昔に想いを馳せて

いるのです。この年撫山は八十一歳でした。

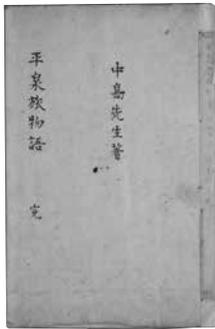
紀州道中

和暄風土好生涯

和暄の風土生涯に好し

南紀看来殊富奢

南紀看来れば殊はた富奢なり



「平泉旅物語」写本 (個人蔵)

明治22年5月半ば頃に陸奥の名所を訪れた際に、30年来の友人の千葉天巖(てんざん)の自宅を訪ね、一緒に平泉を訪れた5月19日から24日までの紀行文。

嶂畔僻村皆瓦屋

嶂畔の僻村も皆な瓦屋

四山都是蜜柑花

四山都て是れ蜜柑の花

明治四十三年(一九一〇)、八十二歳であった撫山は、伊勢神宮に参拝したその足で近畿各地を遊覧し、紀州まで出かけています。ここに描かれている風景は現在の和歌山県有田郡広川町です。「和喧」は氣候が温暖なこと。「嶂畔」は山ふところ。温かい紀州は暮らすのに適していて、しかも裕福そうだ。山ふところの村でも家はどこも瓦葺き。山の斜面にはミカンが一杯花をつけていてうらやましいと言っています。

この時、撫山は同町の豪家浜口家を訪ね、かつて鵬齋先生がこの地に來て浜口家のために撰文した石碑をたしかめています。現在とちがって交通不便な時代に、八十老人がこんな遠隔の地に探訪の旅にでかけたとは、まさに老健(年とって丈夫)というほかはありませんが、もともと撫山は旅が好きで、若いころから平泉へ行ったり赤城を越えたり赤倉温泉を訪ねたり九十九里に遊んだりしています。

## 市指定文化財・撫山中島先生之墓

（光明寺・中島甲臣氏）

神道式の墓。孫の隕臣（もとおみ）が撰文した墓誌銘が存在することから、墓誌が埋められている可能性がある。墓域には、後妻きく、実妹うた、異母弟杉陰（さんいん）、長男靖とその妻子の墓などもある。



生涯健康で、年譜を見ても病気をした記録がほとんどありません。

明治四十三年（一九一〇）八月、現在の熊谷市のあたりで利根川が決壊し歴史に残る大洪水がありました。久喜にも大水が押し寄せ『年譜』には「室ヲ淹スコト四五尺。七日ニシテ始テ退ク。」とあります。撫山の家もちろん被害があり大事な典籍が水にさらされるなどの騒ぎとなりました。このことも災いしたか翌四十四年（一九一一）六月二十四日、撫山は八十三歳で世を去りました。「病ムコト僅二十余日」とありますから大往生だったと思います。

明治初年から、みずから創立した幸魂教舎を維持し、名利を求めず世間に媚びず、地域の人々に愛され地域の人々のために尽くしたすぐれた生涯でした。

## その後の撫山中島家

撫山の墓は市内光明寺にあります。国学の徒でもありましたから



### 中島斗南

(中島桓氏藏)

撫山の次男で、後妻きくの子。名は端蔵。名乗りはまさし。斗南・勿堂(ぶつどう)は号。安政6年生、昭和5年没。



### 中島綽軒

(小林晴夫氏藏)

撫山の長男で、先妻紀玖の子。名は靖次郎。明治19年に靖と改名。名乗りはなごみ。綽軒は号。嘉永5年生、明治39年没。この写真は、小川一真(64頁参照)の撮影。

墓は神道式です。そこには腹ちがいの弟で山水画家として知られた杉陰(栄之甫)の墓と、漢学で身を立えた長男の綽軒の墓もあります。綽軒は現在の栃木市入舟町に私塾「明誼学舎」を開き栄えていましたが、不幸病のため父に先立って亡くなっています。その顕彰碑は地元の人々によって市内の太平山上に建てられています。

綽軒の下の二人の弟、斗南と玉振もそろって漢学で身を立てました。

斗南は若い頃から政治に関心が高く、政治小説や近世外交史などの著書を出版すると共に、雑誌に政治評論を寄せたりしていました。最後は大陸問題に傾倒し『支那分割の運命』(大正元年十月・政教社)を刊行しています。また斗南の漢詩は弟玉振によって『斗南存稿』(昭和七年十月・文求堂書店)として世に出されました。詩才がゆたかで、その作品は人の心を打つものがあります。次の一首は「自嘲戲咏」(自ら嘲けり戯れに咏ず)と題するものです。

我志未嘗讓古人

我が志は未だ嘗て古人に譲らず



中島田人

(中島桓氏蔵)  
撫山の六男で、後妻きくの子。名は田人。明治7年生、昭和20年没。小説家中島敦の父。



中島玉振(鷲宮神社蔵)

撫山の三男で、後妻きくの子。名は疎之助。名乗りはたかし。玉振・蠟山(ごうざん)は号。文久元年生、昭和15年没。

我材豈不若今人

我が材は豈に今人に若かざらんや

閑来欲向天公問

閑来天公に向ひて問はんと欲す

何故生斯無用人

何の故に斯の無用の人を生みしかと

三男の玉振は兄と同じく大陸に渡り、北京の京師警務学堂に職を

奉じていましたが、その間、蒙古事情も研究して『蒙古通志』（大正

五年四月・民友社）を出版しています。帰国後は東京麹町にあった

善隣書院に招かれ、晩年に至るまでここで蒙古語・中国語などの教

授をしていました。かたわら中国の古代文字の研究をし『書契淵源』

（昭和十二年十月・文求堂書店）という大著も出版しています。この

ころの善隣書院の講義テキストをみると、中国の小説や歴史・現状

など、当時の中国を正しく紹介しようとする姿勢が感じられます。

ほかの弟たちもそれぞれ社会的にすぐれた活動をしています。が、

六男の田人は漢文の教師となり、国内のいくつかの中学校で教鞭を

執った後、京城（現在の韓国ソウル）にあった竜山中学校に赴任しま

した。その時、長男の敦とともに彼の地に渡り京城中学校に入学し

### 中島敦の案内板（久喜・中島敦の会）

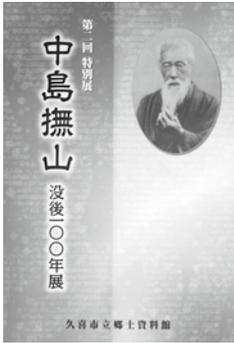
久喜・中島敦の会が、平成27年に久喜新町宅跡に設置した中島敦の案内板。同じものは、平成23年に久喜駅西口駅前にも設置されている。



### 中島敦（中島桓氏蔵）

撫山の孫。六男田人と、先妻岡崎チヨの子。明治42年生、昭和17年没。小説家。

ました。秀才のほまれ高く、ここを四年で修了して旧制の第一高等学校に入り東京大学文学部に進みました。卒業した敦は、縁あって横浜の私立横浜高等女学校に国語の教師として赴任します。縁あってと言うのは、この学校の経営者であり理事長であった田沼勝之助（旧姓角田、現・加須市油井ヶ島出身）が敦の祖父に当たる撫山の塾に学んだ門人の一人だったことです。敦は昭和十六年（一九四一）までこの学校で充実した教員生活をしたのち、国語編集書記として南洋群島のパラオに渡りますが、間もなく帰国して小説を発表し作家生活に入ります。しかし不幸にして、昭和十七年（一九四二）十二月に病のため世を去ってしまいます。没後もその作品に対する評価は高く、名作とされる『季陵』『光と風と夢』などは、いまでも全国的に多くの読者を持っています。なお、初期の作品『斗南先生』は敦の二人の伯父で撫山の次男・三男に当たる斗南と玉振とをモデルとした小説です。もし長生きしていたら、きっと祖父撫山先生を主人公とした小説を書き上げたにちがいありません。



## 第2回特別展展示図録『中島撫山没後100年展』

（久喜市立郷土資料館発行）

久喜市立郷土資料館で、平成23年10月15日～12月25日にかけて行われた特別展の展示図録。本書には収載されていない、撫山の書や画が多数掲載されている。

時代の転変てんぺんに翻弄ほんろうされ、久喜に移り住んで四十年、研学のかたわら、ひたすら土地の人々に学問を授け道義を説いた撫山先生の生涯の孤高が、久喜の風土と共に敦によってどう描かれたかを想像すると、その夭折ようせつが惜しまれてなりません。

なお、中島撫山の顕彰のために、近年では平成二十三年十月に久喜市立郷土資料館で「中島撫山 没後一〇〇年展」が開かれ、展示図録も出版されました。この時は久喜市公文書館所蔵の撫山関係資料をはじめ、個人所蔵の書画の類も多数出品されました。

平成二十五年には、白岡市でも「中島撫山と白岡」という講演会が催されるとともに、市内に残る撫山撰文の石碑をはじめ、同地域から幸魂教舎に学びに行った人々の子孫の所在確認調査なども進められたこともあって個人所蔵の書画が多く発見されて『中島撫山と白岡』という冊子もあわせて刊行されました。

作家中島敦のルートでもあり、今後の久喜市の文化のあり方を模索する上にも、撫山への関心が高まることが期待されます。

1 阪井弁『明治崎人伝』

内外出版協会から明治36年（1903）5月28日に発行。著者の阪井弁（わかち。明治2年～昭和20年）は久良岐（くらき）ともいう川柳作家で、父親の保佑は亀田綾瀬門下で中島撫山と同門。国立国会図書館デジタルコレクションを活用。

2 中島隴臣撰文「中島撫山墓誌銘」

明治44年（1911）6月27日に光明寺に埋葬した際、一緒に埋めた墓誌の銘文。中島隴臣（もとおみ。明治18年～昭和35年）は撫山の孫で、長男靖の子。久喜市公文書館所蔵の「中島元夫家古文書」№2716を活用。

3 『史学雑誌』第32編第8号所収の故中島慶太郎「天平文書田税物價諸表（其一）」

中島慶太郎の遺稿を『史学雑誌』第32編第8号から同編第10号まで（大正10年8月～10月）の3回にわけて掲載した際の最初の回にあたる部分。国立国会図書館のマイクロフィルム資料を活用。

4 中島竦編『演孔堂詩文』

昭和6年（1931）の中島撫山先生没後20年祭に向けて弟子たちが企画して同年発行。上下二冊からなり、上編は古詩・近体・雑文で構成され、下冊は頌銘賛・記・碑碣で構成されている。編さん者は撫山の三男竦之助（しょうのすけ）。久喜市公文書館所蔵の「中島元夫家古文書」№3548を活用。

5 中島撫山遺著『性説疏義』

当時満洲で活動していた増永茂十郎と吉田忠太郎が企画して、中島撫山が明治36年（1903）5月に作成して長男靖に与えたものを写真製版して昭和10年（1935）10月25日に発行。発行者は中島隴臣。上下二冊からなり非売品。久喜市公文書館所蔵の「中島元夫家古文書」№1331を活用。

6 中島竦作製『撫山中島先生略年譜』

撫山中島先生30年祭の記念出版として弟子たちが企画して昭和16年（1941）6月24日に発行。作製者は竦之助。久喜市公文書館所蔵の「中島元夫家古文書」№3084を活用。

7 中島田人撰文「撫山中島先生終焉之地」碑

撫山中島先生30年祭のために弟子たちが企画して昭和16年（1941）11月に久喜新町宅の敷地内に建てた石碑。撰文者は撫山の六男田人。平成12年（2000）4月1日に久喜市の指定文化財（歴史資料）に指定。

8 『書苑』第6巻第4号所収の中島慶著・中島竦増訂「増訂亀田三先生傳實私記（其一）」

中島慶太郎が著した「三先生伝実私記」に竦之助が増訂した「増訂亀田三先生伝実私記」のうち亀田鵬斎先生の方だけを『書苑』第6巻第4号から同巻第7号まで（昭和17年4月～7月）及び同巻第9号から第10号まで（同年9月から10月）の6回にわけて掲載した際の最初の回にあたる部分。国立国会図書館デジタルコレクションを活用。

一 阪井弁<sup>わかち</sup> 『明治畸人伝』<sup>きじん</sup> 所収の「中島撫山」

中島撫山翁の名は、慶太郎といひます。東都乗物町の豪商某の長男です。生家は乗物屋を営み、江戸草創期から続いている名家です。町名の由来も、その生家があつたからだと言われています。翁は幼いときから学問を好み、成長してからは亀田鵬齋の子の綾瀬先生に師事し、鵬齋門下のなかでも特にすぐれた人物として知られるようになります。当時権力を持っていない商人は、まるでたいこもちのようなふるまいで、常に幕府の役人や諸藩の武士たちを接待し、彼らから注文が入ることを名誉とするようなところがありました。翁の人は柄は親切かつ誠実で、古代中国でいうところの君子のような方です。そういうわけで、このような商人の世界を恥と考へていたので、遂に決断して家を弟に譲ります。その後は財産をと

るにたらないものと思へるようになり、みずからも清く貧しく、一日中本を読むような生活に身をおくようになります。明治維新の際、私の父は横浜に住んで税関の職員として働いていました。あるとき横浜に移つてこないかと翁に働きかけたところ、「国は新たに生まれ変わったけれども、国の威信は地に墮ちた。その上、外国人が、我が国でわがままにふるまう様子を見ながら暮らすのは耐えられない。」といつて、この申し出を辞退されました。その後、武州久喜に隠居して、塾を開いて村の子どもたちを教育するようになります。これは、久喜の地が、鵬齋先生が郷学遷善館で教へていたという縁故があつたからです。翁の妻も商家出身です。しかし、夫である翁の考へを正しく理解し、粗末な綿の服を着るなど質素を旨としながら、妻としての務め一筋に徹したのです。これは、普通の商家出身の女性では耐えられないことで、か

池大雅いけのたいがの妻の玉瀾ぎよらんのような方でした。翁は、始めは総髪そうがみでしたが、後に結髪むすかみして現在に至っています。今年で七十五歳になりますが、ちよつと見ただけですぐれた学者だとわかります。翁は、かつて平泉を訪れ、その歴史的な史跡等を紹介した『平泉旅物語』を著されました。

また、『日文章篆考』を著し、神代文字の草書体と楷書体とが同一体であることを明らかにしました。これは、鶯谷先生の教えである漢籍折衷派に神典説を融合させた新しい考え方によるものです。すなわち、翁は、鶯谷先生の教えを現在にまで忠実に体现されている方なのです。

『日文章篆考』の総論では、次のように述べています。

私が日文の草書体を読み解き、その文字を良く観察したところ、四十七文字すべてが○の一筆から生まれ、○の一筆が様々に変化し、最後に再び○の一筆に戻るという法則があることが、この草書体によく表れている

るといふ結論に達しました。（中略）これは、日文の縦横十四画と、そこから構成される三十六文字すべてが、○の一筆から始まると考えざるを得ないということを理解するところから出発すべきです。そうすれば、両方あわせた五十文字が、日常的に使用する基本的な文字ということで、この○の一筆から様々に変化したものであるということがわかります。同じように、○の一筆に戻ること、○の根本概念である基本的で枢要な徳の一つを失わないという理由があることがわかるのです。我が国の氏名部うじなべの職業から、自然界に発生するあらゆるものなかで、およそ文字にすらできなようなものまでが、すべて天御中主大神あめのみかぬしのおかみから生まれるたもので、様々な変化を生じながらも、この世界でなにがしかの役割を担って生まれたものなのです。（氏名部の職業は、）最後には天御中主大神に嗣いで、現

人神として天下をしらしめす大日本根子天皇（おおやまとこのすめらみこと）に仕え奉り、その大きな政治の統一のなかで、一つも欠くことができないほど一体となつて符号しているものです。また、自然界といえども、どうして「想像もできない奇勝」の一言で片付けられるのでしょうか。そこで、今度は中国の古典を取り上げて調べてみると、「著（し）の徳（とく）は田（えん）にして神（しん）」とあり、「楽（がく）は同（どう）を為（な）す」とあるのは、日文の草書体の変化の始まりに近いものといえるでしょう。「卦（か）の徳（とく）は方（ほう）にして以（もつ）て知（ち）」とあり、「礼（れい）は異（い）を為（な）す」とあるのは、日文の楷書体が言葉や事物の区別を厳格にするために一面も乱れずにあることに近いものといえるでしょう。すなわち、道の変化形として、「礼」は敬い慎むことで「義」に近いものであり、「楽」はやわらかくことで「仁」に近いものといえるでしょう。およそ君臣・父子・夫婦の道から友達や君主との交わ

りまで、その違いを尊重していくことで、調和が生まれてきます。そして、その調和が深まっていくと、その違いでさえも一体のものとなつて立派で中正な世の中になつていくのです。「聖王（せいおう）は仁義礼楽（じんぎれいがく）を以（もつ）て家邦（かほう）を平治（へいち）す」という道も、「精気（せいき）は物を為（な）し、遊魂（ゆうこん）は変（な）を為（な）す」という鬼神の情状も、「允（いん）に厥（そ）の中（ちゆう）を執（とつ）れ」という言葉も、「一（いつ）以（もつ）て之（こ）れを貫（つらぬ）く」という義も、すべてこの日文の中に、簡にして要を得た形で見ることができるとは驚きです。生前、鶯谷先生が話してくださいました。「日本の古典に深く通じていると、中国の古典の深い意味も簡単に理解することができます。」と。本当にその通りです。私の必要以上に世話を焼こうとする気持ちから、この日文を例にして、中国の儒学者たちに問いかけようとなりました。世俗的な学問をしている人には笑われてしまうことは覚悟しています。ただ、古い昔

の聖人・賢人のような方がおられるのであれば、私はぜひその方々に跪いて教えを乞い、襟を正して感服することだけはご理解ください。

翁は書も大変優れていました。鵬斎流と呼ばれる書風を、現在でも正しく伝えることができるのは恐らく翁一人だけでしょう。今年四月に翁が銚子を訪れた際、たまたま我が家にお寄りいただいたので、揮毫きごうをお願いしました。

翁は最近詠んだ詩を、次のように書いてくれました。

国のためにも天皇のためにも功はなく、眠って食べるだけの無役な日々を過ごしています。新しい年を迎えて今年こそは花を開くか芽を出すか、七十四歳になる頑固なじい様よ。

右の書は明治三十五年の春に書きました。

撫山・老儒・慶

龍動ロウドウに祇役する山本技師に送る。

蛇やムカデを追い払うことのできる「ひれ」を、遠い異国にまで行って取ってこようとすると、なんと勇ましいことなのでしょう。

翁は和歌もたしなみ、佐致麻呂という号もあります。恐らく埼玉県の義の幸玉からとったものではないでしょうか。翁の長男靖さんは栃木町に暮らして家塾めいがく明誼学舎を開いています。翁は日ごろ田園学を議論できる人がいないことを歎き、また田園学のような学問がいつのまにか無くなってしまふことを悲しんでいます。人柄が親切かつ誠実で、古代中国でいうところの君子のような翁は、立派な人物であるといえるでしょう。日本の各地を旅行されていた若い頃に友人に語ったところによると、「武州の山水は、私の心の中でいつくしむに手頃なところである。」と。これによって「撫山」という号をつけたのです。今は久喜の地に隠居していますが、機会さえあれば各地に

足を運び、詩を詠み、歌を詠うことを続けていくと話してをされておいででした。

## 二 中島晴臣撰文「中島撫山墓誌銘」

亡父撫山の諱は慶、字は伯章といい、清右衛門君の長男になります。母は岡本氏です。文政十二年四月十二日に江戸で生まれ、明治四十四年六月二十四日に埼玉県久喜で亡くなります。その後、二十七日に久喜の北部にある墓所に埋葬します。享年八十三歳。始め日永氏を妻としましたが、若くして亡くなり、亀田氏を後妻に迎えます。子は七男五女で、十四人の孫がいます。若い時から学問を好み、亀田綾瀬・鶯谷の二人の先生に師事してひたすら学問に励み、六十余年もあつという間のことでした。

長生きをされ、また子孫も多く残されます。亡父の業績は、必ずしも今の世の中で正しい評価をされているわけではありませんが、正しい道を歩んできたことは、孔子様と比べても決して恥じるものではありません。故事に「泰山頹ちて梁木壞る」とあるように、大きな柱が崩れ落ちるように亡父も旅立たれたのです（これを土の中に記します。この文章を永遠に忘れないようにしてください）。

## 三 『史学雑誌』第三十二編第八号所収の故中島慶太郎「天平文書田税物價諸表（其一）」に付した著者略歴

故中島慶太郎氏は、号を撫山といいます。江戸の中島清右衛門という人の長男として、文政十二年に江戸の江東

亀戸に生まれます。国学・漢学を、当時関宿藩の儒官であつた亀田綾瀬に学び、のち両国矢ノ倉や神田お玉ヶ池等に塾を開いて漢学を教授します。明治元年に、住まいを武蔵国埼玉郡鹿室村に移します。明治二年にさらに同郡久喜本町に転居し、続いて私塾幸魂教舎を開いて子弟を教育します。明治四十四年に八十余歳の高齢のために亡くなります。氏の遺稿にあたる本論文は、氏が『大日本古文書』を判読研究して得たもので、ところどころに氏の卓見をみることができます。今回は、服部博士のご好意により、これを本誌に掲載することができました。

四 中島竦編『演孔堂詩文 下巻』所収の中  
島竦撰文「演孔堂詩文跋文」

亡き父の詩文は、とりわけ本業の余技に過ぎないものです。普段作つたものも少なくはありませんが、それほど気にかけることもなく、また特に惜しむということもなかったのです。そういうわけで、作つた詩稿の多くは門人たちが持ち去つてしまい、かりに持ち去らなかつたとしても、父が甕を覆つて蓋にしたり、壁の穴をふさぐのに使つたり、さらには紙袋にしたり紙縫りにしてしまつたりしました。たとえそうでないとしても、習字の下書きに再利用して一字もわからなくなつてしまつたものも少なくありません。こういうわけで、明治以前の作品は一稿も家には残つてなく、わずかに残っているものはすべて教え子の家に残っているものなのです。自分が十二・三歳の頃、初めてこのことを惜しむようになり、拾つて手元に置いたり、書き写して保存したりするようになります。そこで明治以後のものはほぼ備わるようになって

たのです。しかし、成人してからは自分が家にいることが少なくなり、兄弟や甥たちのなかにも、この作業を引き継ぐ者はなく、その後の大半は失われてしまいました。

そうはいつても、その頃の父はすでに老いていたので、もし作つたとしても碑や墓の撰文あるいは他人とやりとりした文章くらいのものでした。亡き父の得意とするものは、もちろんこのようなものではありません。亡き父は、一生を通じて自尊心が非常に高く、俗に従って世におもねるということを否定してきました。もちろん亡父の詩文も、その人柄同様です。簡潔で力強く群を抜いて高く聳え立ち、無駄な文字は一字としてありませんでした。また、媚びるような言葉を喜ばないうえに、平凡で弱弱い文章も嫌いでした。こういうわけで、大抵の文章は読みにくくて難しく、時代の好みに合わせようともしませんでした。頑固に古臭さを守り、知己を当世に求

めようともせず、作つたものを世に出して人に示そうともしませんでした。もちろん、人々も亡父の作品を知ることはありませんでした。父が亡くなってから二十年が経ちました。先生の姿かたちを再び見ることはできませんが、弟子たちの先生を思う追慕の念は、昔と少しも変わることはありません。ちかごろみんなが集まって相談したところ、「どんなに思い続けても、再び先生にお会いすることはかなわない。それでも、先生が作られた詩文を見ることができれば、まるで先生がいたときのように感じる事ができるのでは。」という話になりました。そこで、私のところにやってきて頼むので、編集していた亡父の詩文を出して見せてあげました。すると弟子たちは大層喜び、みんなでこれを刊行して頒布し、これを永く伝えたいとお願いをしてきたのです。そこで、急いで一冊にまとめて彼らに与え、これを刊行させるように

したのが本書です。このことは、亡き父の詩文が、世に  
伝わらなくなることを惜しんでのことなのです。

## 五 故中島撫山著 『性説疏義』 下冊 『所収の

### 中島竦撰文「性説疏義跋文」

亡父は江戸の出身です。亀田鵬齋先生が没した三年後に  
生まれました。十四歳で、亀田綾瀬先生の教えを受ける  
ようになります。学び始めて十二年目に、綾瀬先生が亡  
くなられました。綾瀬先生の生前、老人となって病気を  
されていたとき、養子となって亀田家の後を継いだ鶯谷  
先生とともに各地に出かけました。鶯谷先生は亀田家の  
学問を継承し、なかでも性説について最も力を注いで研  
究された方です。あらゆるものを見聞きするとともに、

読まないものもありません。かつて『論孟集注異説』『学  
庸章句異説』を著しました。両方あわせて三十巻から四  
十巻にも及びますが、思うところがあつてすべて改訂し  
てしまいました。そのときに鶯谷先生が「韓愈の言葉に  
『古を考えるということは深い井戸の水を汲むつるべ繩  
を手に入れるようなものであり、古の道を考究するのは  
井戸の水を汲むのと同じである。ただ、つるべ繩の短さ  
を歎くことはあつても、井戸の深さを問題にすることは  
少ないのです。』とあります。そこで、私は今まで著した  
ものをすべて棄てて、古義一筋に専念するようになった  
のです。」と話されました。亡父は、この言葉を聞いて、  
しばらくは何も手につかないほどでした。ついには家の  
財産をすべて堂弟某に譲り、妻子弟妹を引き連れて、別  
の地に宅を構え、生徒を集めて儒学を教えたり、一日中  
本を読んだりすることを楽しみ、妻子が食べるものがな

いと言っても平然としていました。たまたま同門の新井稲亭先生が病気で急死されたとき、先生を突然失った生徒の多くが、父の生徒になります。この後、稲亭の嗣子桐蔭も亡くなってしまいます。稲亭・桐蔭親子は埼玉出身だったことから、埼玉の弟子たちが学ぶべき先生がいなくなってしまうことに悩み、父のところに来て先生になつて欲しいと頼んだのです。この頃は、幕府の統制が利かなくなり、様々な国論が沸きあがり、各藩は地元に戻り、江戸は寂しくなっていました。治安も乱れて、昼日中からも盗賊等が横行するような時期だったのです。その上、飢饉等も度々ありました。物価は上昇し、人々は鬱々とした日を送っていました。亀田門下とともに学んだ友人たちも江戸を離れ、各々ふさわしい場所へと帰っていきました。亡父はこの時もまた埼玉の地に避難し、その後久喜に移ったのです。久喜には遷善館という学校

があつて、亀田鵬齋先生が訪れ講義をされたところでもあります。館は既に無くなつてしまつていなければならないけれども、鵬齋先生を慕う住民の思いは今も脈々と残っています。そういう訳で、この地に留まつて家を構えたのです。亡父は以前から世俗的なものを嫌い、時代に媚びるようなことはありませんでした。出処進退には背を向け、世の中に訴えるようなことも望みませんでした。粗末な家にひっそりと暮らし、わざわざ旅じたくをして再び東京を訪れるようなこともありません。ただただ中国の先王の道を村の弟子に教えるだけで、決して世間に知られるようなことはありませんでした。したがつて遺著があつても、それは家に伝わるだけのことだったのです。今年になつて増永茂十郎君と吉田忠太郎君の二人が遠い満洲の地から寄こした手紙に、「先生がお亡くなりになつて、あつという間に三十年の月日が経とうとしています。遺著

は長いこと箱の中に収められ、ただ紙を食べる虫のお腹を満たすだけのものになってしまふことを恐れています。僕たちは、このことを大変残念に感じざるを得ません。

できることならお金を出しあつて出版し、同じような考えを持つ人たちに頒布し、あわせて先生の存在を未来永劫にまで伝えていきたい。」と書かれてありました。そこ

で箱の中を探つて、「性説疏義」という冊子一編、上下両巻を出してきて二人に渡します。これは亡父晩年の手になるもので、自分で編集して綽軒先生に渡したものでしたのです。現在までも墨の色はそのまま、まるでついで最近書かれたもののように見えます。この書に向き合っている、まるでかつての先生の姿かたちも目の前に蘇ってくるように感じられます。まるで二十年余りの年月がなかったかのようです。弟子たちが昔のことを忘れずと同じ時間を過ごしてくれていたことも感慨深いことで

す。亡父の学識は弟子であれば誰しもわかつていることです。今さらこれ以上何を言うことができるでしょうか。

## 六 中島竦作製『撫山中島先生略年譜』

文政十二年（一八二九）四月十二日に江東亀戸の曾祖

父の隠居宅で生まれます。二か月前の大火災で新乗物町の本宅が罹災し、新居が完成していなかったことによるものです。そこで、この亀戸で生まれます。

天保十年（一八三九）十一月に母の岡本氏が亡くなりま  
す。十一歳の時のことです。

十三年（一八四二）十四歳。初めて亀田綾瀬先生の門に入ります。綾瀬先生の門人であつた出井貞順の推挙によるものです。岡本氏が亡くなった後、出井氏が父の後妻

となっていました。この女性が貞順先生の姉にあたります。そういうわけで、最初に句読を習ったのは貞順先生からでした。貞順先生もその才能を見込んで綾瀬先生の門に推挙したのです。綾瀬先生六十五歳、鶯谷先生三十六歳の時のことです。貞順の名は寅、字は炳文といい、医者でした。後に、父と出井氏は離縁しますが、撫山先生と貞順先生の交友は変わらずに続いていきました。

**弘化二年（一八四五）** 十七歳で元服し、鶯谷先生から伯章という字を付けてもらいます。

**四年（一八四七）** 十月二日に父の良雅君が亡くなります。十九歳の時のことです。この時以来、家の仕事をみるようになり、世俗的なことに煩わされるようになりますが、学問も続けていきます。この年の「答馬場生書」によると、友人馬場君が撫山先生に期待していたことが読み取れます。馬場君は名を弘といい、字や号はわかりません。

撫山先生の親友です。綾瀬先生の遺稿をまとめた「がくけい学経堂文集」は、馬場君がまとめ始めたものです。

**嘉永六年（一八五三）** 二十五歳。四月十四日に綾瀬先生が亡くなります。これ以降は、鶯谷先生に師事するようになります。

**安政四年（一八五七）** 二十九歳。祖父の勇哲君が亡くなります。以前から世俗的なことに煩わされることを嫌っていました。祖父母が健在であったために、勉強を続けながら家の仕事も行ってきました。しかし、これ以降は、自分にうそをつくことができなくなります。秋になると突然武州から上毛かみつけにかけて出かけてしまい、親戚も止めに入りますが、決心が変わることはありませんでした。この時のことは「楽托日記」に記されています。昨年八月の台風で、亀戸の曾祖父の隠居宅が激しい被害に遭っていました。江戸に戻ってきてから、この壊れた

宅の使えそうな材料を集めて持ち帰り、両国矢ノ倉の地に家を築き、すべての財産を従弟某に譲り、十二月に妻子弟妹を引き連れて矢ノ倉に移ってしまします。出井氏の家とはご近所になり、貞順先生は大変喜ばれ、毎日行き来するようになりました。貞順先生が、その才能を見込んだことは間違いではなかったのです。

**五年（一八五八）** 三十歳。正月十三日に演孔堂を開講します。この後は、毎年この日に開講することが慣わしとなりました。鶯谷先生もお見えになりました。春になると家の修築をまた行います。「小築三首」という漢詩はこの時のものです。七月に鶯谷先生にお供して、友人千葉天嶮と一緒に上毛の草津に出かけます。この年、江戸ではコロリが大流行していたのですが、草津からの帰りに道に王子に着いて初めてこのことに気付いたと、後に話してくれました。

**六年（一八五九）** 八月に新井稻亭が亡くなります。埼玉郡鹿室の出身で、名を豊、字を大年、号を稻亭居士といっています。綾瀬先生門下の先輩で、塾を神田お玉が池に開いていました。そういうわけで、大分前から稲亭親子とは交流がありました。突然稲亭先生が亡くなったため、門人たちが困り果て、塾を引き継いで欲しいとお願いをしてきたので、塾を神田お玉が池に移します。

**万延元年（一八六〇）** 三十二歳。夏から秋にかけて、脚気の病気になる。お灸を数十日続けたら治つてしまいい、二度と起こることはありませんでした。幼い頃は大変病弱でしたが、成長するようになって段々と健康になり、これ以降は殆ど病気に罹らなくなつたようです。「人間も三十歳を超えると病気に罹らなくなる」と常々話してくれました。

**文久元年（一八六一）** 三十三歳。稲亭先生の遺愛の碑が

完成しました。篆額は堀長門守直虎とありますが、実際

は撫山先生の代筆です。直虎は信州須坂の藩主で、慶応

四年に將軍徳川慶喜を諫めたことから自害し、良山公と

諡名された人物です。須坂藩主になる前は鶯谷先生のと

ころにも来て学んでいましたが、藩主になってからは来

ることができず、逆に鶯谷先生を八丁堀の藩邸に招いて

講義を受けるようになりました。しかし、鶯谷先生も毎

回通うというわけにもいかないので、大抵は撫山先生が

代わって講義に行かれました。大体月に数回というのが

通常でした。こういうわけで、撫山先生の顔は、須坂藩

士の間ではかなり知られていたのです。

三年（一八六三） 三十五歳。老中久世大和守広周が幕府

から塾居の命を受けます。鶯谷先生も休暇を取って休み

たいと希望していました。十二月に鶯谷先生に代わって

閑宿に出かけ藩校教諭館で講義を行います。新しい藩主

にお会いします。藩主の年はまだ二十四歳か二十五歳く

らいです。月の上旬に出かけ、下旬に帰ってきます。稲

葉君が同行しました。これ以降、閑宿藩の藩士が度々や

つてきて講義を聴くようになります。

慶応二年（一八六六） 三十八歳。七月に新井桐蔭が亡く

なります。桐蔭は稲亭の子どもで、撫山先生の一歳年下

ということもあり、撫山先生を兄と慕っていました。し

たがって、桐蔭の弟子たちは、桐蔭の遺訓を奉ずるとと

もに、桐蔭の父稲亭没後の例に倣って、再び桐蔭先生の

後を引き継いで欲しいとお願いしてきました。そこで大

場村の大垣氏宅に出かけてできる限りの講義を行います。

大垣致遠は桐蔭の親戚でもあり、桐蔭の弟子でもありま

した。閑宿藩の藩士のなかにも、大垣氏宅の講義を聴き

にやってくるものが出てきました。

三年（一八六七） 三十九歳。この頃、徳川氏の政治は衰

退し、外交でも色々と混乱があり、江戸の都も騒がしくなってきました。六人の幼子を抱え、もう一人も胎内に入りましたので、撫山先生も学問だけに専念しているわけにはいきません。こういうわけで、冬の間だけでも大場村の講義を休止したいと望んでいました。しかし、弟子たちの強い要望があつたので、やむなく一族を引き連れてしばらくの間大垣氏宅に住み込みます。

**明治元年（一八六八）** 四十歳。三月に江戸に帰ります。

この年に徳川氏は大政奉還をして一大名になりました。夏には、鶯谷先生も江戸を離れ閑宿に移り住みます。ともに学んだ学友たちも散り散りになり、市場公謙は出身地の常陸に、堀内伯教も出身地の信州にそれぞれ帰り、大関公柔は南総に移り住みます。撫山先生も、冬の初めになると大垣氏宅を出て、鹿室村にある新井桐蔭の旧宅に移り住みます。

**二年（二八六九）** 四十一歳。正月に閑宿藩で鶯谷先生が

入獄されるといふ災難に遭います。四方八方に手を尽くし、八月になってようやく禁が解けます。十二月に新井氏宅を出て、久喜に移り住みます。この年に喜連川に出かけます。加藤君が同行しました。

**四年（二八七二）** 八月に栃木に出かけます。落合君が同行しました。冬の間だけ栃木に移り住みます。

**五年（二八七三）** 戸籍令が施行されます。これを機に、久喜の地に戸籍を編製します。

**六年（二八七三）** 私塾を廃して新たに公立学校を設けるという学制改革があり、一月に埼玉県第九区に初めて一校が設置されます。門人たちを率いて体験見学に行きます。四月になると体験見学を止めます。八月に神道教導少講義を授けられたことから、自宅に幸魂教舎を開きます。この年、書風を大きく変え、楷法を捨てて隸体を用

いるようになりす。

**七年（一八七四）** 三月に権中講義を授けられます。七月

に堀内伯教が「翼賛教憲議」一篇を教部省に提出します。

撫山先生が内容の一部に手を加えています。この年の春

に筑波に出かけます。内田君が同行しました。母の年老

いた姉が土浦にいたので会いに行つたのです。秋にはま

た栃木に出かけます。斗南先生が同行しました。鞍掛山くらかぎさん

に行きました。

**八年（一八七五）** 堀内伯教は長いこと病気で東京にいま

した。介護をするため、東京にすることが多くなります。

八月に伯教が亡くなります。冬には信州に出かけます。

また内田君が同行しました。伯教の家の事に関係しての

ことです。十一月に鶯谷先生の跡継ぎの藹吉君も亡くな

ります。鶯谷先生も年老いて、末子も成人していません

でした。そこで、この後一〜二か月中に一回は上京して、

鶯谷先生の仕事を助けるようになりす。

**九年（一八七六）** 学生の数が増えてきたので、夏に一部

屋を増築します。秋にはまた栃木に出かけます。江原君

が同行しました。出流山いづるさんの奇勝も見えます。

**十年（一八七七）** 秋から冬にかけてマラリアを発症し、

五十日以上苦しみました。これまで二十年近く病気をし

てきませんでした。このような病気も初めてのことです。

**十二年（一八七九）** 五十一歳。四月に杉陰先生と一緒に

信州に出かけます。斗南先生も同行しました。七月に帰

つてきます。安政四年以降遠くへの旅は控えていました。

たとえ遠くに行つても月を跨いで行くことはありません

でした。この後は月を跨いで出かけることが多くなりま

す。子どもたちが成長したからだと話してくれました。

**十三年（一八八〇）** 一月に綽軒先生が明誼学舎という塾

を栃木に開きます。八月にまた杉陰先生と一緒に下毛に

出かけます。山口君と大作君も一緒に日光山に登り、遂には足利まで足を延ばして足利学校の聖像や蔵書を観覧します。

十四年（一八八二） 八月に鶯谷先生が病気になるしました。

すぐにでもかけつけようとしていたところ、夜になって「今朝方亡くなられた」と連絡がありました。その知らせを聞いてすぐに出かけます。

十五年（一八八三） 五月に父方の叔父と叔母を連れて来た日光に出かけます。八〜九歳の頃に祖父母に連れられて一緒に日光に出かけてから五十年以上が経ちました。

叔父・叔母といっても二〜三歳年長というだけです。昔のことを懐かしんで、一緒に出かけようとお誘いしたのです。

十六年（一八八三） 夏に常陸に出かけ、霞ヶ浦を渡って麻生の市場公謙を訪ねます。高木君が同行しました。八

月に栃木に出かけ、綽軒先生を連れて一緒に険しい古峰ヶ原や石裂山を訪れます。

十七年（一八八四） 秋に常陸の筑波郡神村に出かけ、鵬齋先生の稲垣君碑の拓本を採ります。高木君が同行しました。

十八年（一八八五） 秋に下毛の水代に出かけ神職を書き、その足で栃木に向い、戸奈良村の石井氏を訪ね一緒に唐沢山に登ります。田人君が同行しました。七月に開設し

た東北線で宇都宮に出かけます。往来がとても便利になったので、これより以降、大抵年に一〜二回は栃木に出かけます。したがって、以後特記事項がない場合は、特に記しません。この年に「日文章篆考」を著します。

十九年（一八八六） 秋に上毛に出かけ、天田氏宅に泊まり、一緒に三波川の美石を見た後、国分寺の跡を訪ねます。

二十年（一八八七） 秋から冬にかけて上毛に出かけ、赤城山を越えて、沼田に向かい、追貝温泉おつかひに泊まってから帰ります。

二十一年（一八八八） 六十歳。十二月に高田君成が亡くなり、君成の名は俊貞、号は春汀といい、栃木の人です。綾瀬先生門下で親友でもありました。栃木に出かけることが多いのは、彼がいたからです。この年に「三先生伝実私記」を著しました。

二十二年（一八八九） 以前から千葉天巖と約束をしていて、度々松島に出かけようと思いつながら果たすことができませんでした。五月に大住氏と天田氏を誘って一緒に松島に出かけ、遂には赤生津あこうづの天巖を訪ねます。天巖は鶯谷先生門下の後輩で、幼名を得二、字を其由といい、赤生津の人です。一緒に陸中の中尊寺や達谷窟たつこくのいわやを見た後、その足で多賀城や国分寺の跡を訪ねて帰ります。秋に南

総の木更津に出かけ、また国分寺や総社の跡を訪ねます。  
二十三年（一八九〇） 夏から秋にかけての多くは、栃木にいます。

二十四年（一八九一） 一月二十九日に実妹の楨田うたが亡くなります。早く母親を亡くしたので、弟妹の多くは腹違いで、実の弟妹は彼女だけでした。したがって、その辛さは想像に難くありません。

二十五年（一八九二） 六月に南総の九十九里浜に出かけます。

二十八年（一八九五） 秋から冬にかけて信越に出かけ、帰ってから上毛に出かけて金洞山こんどうさんに登ります。

二十九年（一八九六） 春に房州の勝山に出かけ、洲崎まで足を延ばします。

三十年（一八九七） 秋に常陸の井関に出かけます。

三十一年（一八九八） 七十歳。今までは老と称すること

はありませんでした。今年になって自分で私印「七十日老」を作つて老と言うようになります。以後は毎年この印を使います。また、別に年を記した小印を作つて併用し、七十歳以上の証拠とします。四月に弟子たちが長寿を祝う宴会を開いてくれました。

三十二年(一八九九) 八月に下毛の川治温泉に出かけます。一度帰りますが、その後栃木に出かけます。偶然にも綽軒先生が糖尿病を患い苦しんでいたので、少し落ち着くまで滞在し、落ち着いてから帰りました。

三十三年(一九〇〇) 秋に栃木に出かけます。思いがけずにめまいや嘔吐の症状があり、数日間は寝て過ごすことになりました。この後、度々この症状で苦しむこととなります。

三十六年(一九〇三) 五月に「性説疏義」を著します。六月に悪性のできものができます。この年に開設した中

央線で、七月に甲州の御嶽みたけに出かけます。野原君が同行しました。

三十八年(一九〇五) 四月に病気で寝込みます。少し苦しい状況でした。治つてから常陸の平磯に出かけます。

三十九年(一九〇六) 五月に杉陰先生が亡くなります。

六月に綽軒先生が亡くなります。娘の夫にあたる塚本生も肺を患つて長いこと寝たきりです。撫山先生の心中を慮つた家族の提案で、八月に信越に出かけ、赤倉温泉に宿泊します。出かけた翌日に塚本生が亡くなります。

四十年(一九〇七) 八月に相州の横須賀に出かけます。

四十一年(一九〇八) 八十歳。

四十二年(一九〇九) 秋に本町から新町に転居します。

四十三年(一九一〇) 夏に伊勢神宮を参詣し、遂に近畿の名所をまわります。江原君が同行しました。八月に長雨大水があり、家が一メートル以上も浸水し、七日後

によろやく水が引きました。冬に栃木に出かけ、今泉の神輿を揮毫します。生涯を通じて神輿を揮毫することが多かったのですが、これが最後になりました。

四十四年（一九一） 六月に病気に罹り、わずか二十数日後の同月二十四日、突然亡くなります。享年八十三歳。

## 七 中島<sup>たびと</sup>田人撰文「撫山<sup>しゅうせん</sup>中島先生終焉之地」 碑

亡父の諱は慶、字は伯章、号は撫山と言います。文政十二年四月十二日に、江戸の亀戸で生まれました。十四歳のとき、はじめて亀田先生に弟子入りして、綾瀬・鶯谷の両先生につき従って学びます。学問が成就し、私塾を両国の矢ノ倉に開いて、演孔堂と称しました。のちに住ま

いを神田のお玉が池に移しました。明治維新の際に都下を離れて、武州埼玉郡鹿室村に仮住まいをします。まもなく住まいを同じく埼玉郡久喜本町に定め、幸魂教舎を開いて、この地方の子弟に学問を教えました。以来四十年間に入門した者は千数百人にのぼります。明治四十四年六月二十四日、家で亡くなりました。享年八十三歳でした。亡父の学問の講義は、国学を中心にしなから、儒学によって補うというものでした。亡父が言いました。

「わが国の神道は、中国の聖人の教えた儒教の道とよく一致する」と。これこそ亡父の学問が、他のいわゆる漢学者たちと大きく異なっている理由です。いま、亡父が世を去ってから三十年が経ちました。けれども門下生たちの尊敬の念は昔に劣るところはありません。そこで門下生たちが相談して、石を家の片隅に建てて、「撫山中島先生終焉之地」と刻み、亡父の名を後世に伝えようとし

ます。ああ、師について学び、正しく師に仕える道の衰えた今日、亡父の門下生たちが亡父に向ける志は、きわめて美しく、またすぐれていると言うべきなのです。

八 『書苑』第六卷第四号所収の中島慶著・  
中島竦増訂「増訂龜田三先生傳實私記(其二)」  
に付した著者略歴

中島慶は、字を伯章、号を撫山と言います。文政十二年四月十二日に江戸で生まれました。十四歳になった時、亀田綾瀬先生の教えを受け、その後綾瀬・鶯谷の両先生に師事します。学問で自立できるようになると、初めは両国矢ノ倉で演孔堂という塾を開きました。後に神田お玉ヶ池に移ります。明治維新の際には武州埼玉の久喜の

地に居を構え、幸魂教舎という塾を開いて近隣の子どもたちを教育するようになりました。これは、昔、この地に遷善館という学校があり、この館記の碑文が鵬齋先生の撰文であったことや、鵬齋先生自らが館で授業をされたこともあるという縁故によるものです。以来四十数年、教え子の数は千数百人にも及びました。明治四十四年六月二十四日に亡くなります。享年八十三歳でした。遺著として『演孔堂詩文』や『性説疏義』等があります。明治末年には、曾孫にあたる亀田雲鵬先生以外で、鵬齋先生の学問を正当に受け継ぐ人としては唯一の人となり、亀田鵬齋門の長老ともいえる人物でした。

和 暦	西暦	年齢	事 項
文政12年	1829	1	・亀戸で生まれる。
天保10年	1839	11	・母親のとよ（岡本氏）が亡くなる。
天保13年	1842	14	・亀田綾瀬の門に入る。
弘化2年	1845	17	・元服し、亀田鶯谷から「伯章」という字を与えられる。
弘化4年	1847	19	・父親の良雅（11代清右衛門）が亡くなる。
嘉永6年	1853	25	・亀田綾瀬が亡くなる。
安政4年	1857	29	・祖父の勇哲（10代清右衛門）が亡くなる。 ・「楽托日記」を執筆する。 ・妻子弟妹と共に日本橋新乗物町から両国矢ノ倉に転居する。
安政5年	1858	30	・両国矢ノ倉で演孔堂を開講する。
安政6年	1859	31	・先輩の新井稻亭が亡くなる ・両国矢ノ倉から神田お玉が池に転居する。
慶応2年	1866	38	・新井稻亭の子の桐蔭が亡くなる。
慶応3年	1867	39	・大場村の大垣氏宅に一家で仮住まいする。
明治元年	1868	40	・鹿室村の新井桐蔭の旧宅に一家で移り住む。
明治2年	1869	41	・亀田鶯谷が関宿藩で入獄される。 ・久喜本町に一家で移り住む。
明治5年	1872	44	・戸籍を久喜本町に編製する。
明治6年	1873	45	・久喜本町で幸魂教舎を開講する。
明治9年	1876	48	・幸魂教舎を増築する。
明治14年	1881	53	・亀田鶯谷が亡くなる。
明治18年	1885	57	・「日文章篆考」を執筆する。
明治21年	1888	60	・親友の高田春汀が亡くなる。 ・「三先生伝実私記」を執筆する。
明治22年	1889	61	・「平泉旅物語」を執筆する。
明治24年	1891	63	・実妹の榎田うたが亡くなる。
明治30年	1897	69	・同門の阪井保佑が亡くなる。
明治36年	1903	75	・「性説疏義」を執筆する。 ・阪井保佑の子の弁が『明治畸人伝』を刊行する。
明治39年	1906	78	・異母弟の栄之甫（杉陰）が亡くなる。 ・長男の靖（綽軒）が亡くなる。 ・四女塚本うらの夫が亡くなる。
明治42年	1909	81	・久喜本町から久喜新町に一家で転居する。
明治44年	1911	83	・83歳で亡くなり、光明寺に埋葬する。 ・孫の贖臣が「中島撫山墓誌」銘を撰文する。
大正10年	1921		・『史学雑誌』に中島慶太郎遺稿の「天平文書田税物價諸表」が3回にわたって掲載される。
昭和6年	1931		・中島棟編さんの『演孔堂詩文』が刊行される。
昭和10年	1935		・中島撫山の遺稿『性説疏義』が刊行される。
昭和16年	1941		・中島棟作製の『撫山中島先生略年譜』が刊行される。 ・六男の田人撰文「撫山中島先生終焉之地」碑が久喜新町宅の敷地内に建立される。

先君之於詩文，殊緒餘之業耳。平生所製，雖不為少，不甚經意，又不甚惜，有所屬稿，多為門人諸生所攜去，即不攜去，亦先生手親覆，或補綴，甚則糊為紙，裱為紙，燭否，則臨池漫畫，不辨一字，以故明治以前之作，家不留一稿，其僅存者，皆出乎諸生之家。年十二三始知惜之，拾而收之，繕而存之，故明治以後略備。既長多不在家，諸弟子姪，無繼之者，亦復散佚，過半。然先君亦已老矣，儻有所作，不過碑識、墓碣、應酬文字而已，得手之處，不在此也。先君一生自持甚高，不肯從俗，阿世其於

**演孔堂詩文** 下冊 六十三

詩文亦猶其為人，簡勁峭拔，惜墨如金，不喜鋪纏，尤惡平弱，大抵詰屈聱牙，不投時好，古聲鏗鏘，不求知音於當世，不肯出示於人人，亦因莫識焉。今已逝二十年矣，音容不可復見，而諸生仰慕之誠，不減昔日。近日家謀日思，先生不可見，見先生所製，猶見先生，就來請，乃出所編次示之，諸生大喜，皆願刊而頒之，傳而承之，急繕一通，以與之，俾其付手民焉，亦所以惜其不傳也。

昭和六年一月下濬 男 謹識

演孔堂詩文跋文(久喜市立郷土資料館藏)

「關係資料 解題」4(24頁)參照。

先君江戶人，鷗翁歿後三年生，生十四年，贊謁綾瀨先生，親炙十二年，先生逝，其未遺老而疾也，從令嗣谷先生游，先生祖述家學，尤注精於性說，博覽洽聞，攸弗讀，曾著論孟集注，異說學庸章句，異說亡慮三四十卷，一旦翻然改之，曰韓愈氏有言，汲古得脩，經稽古之道，宜若汲井，然唯患繩之不脩，不患井之不淺，盡棄所著，一歸古義，先君既聞其說，久忘世味，遂推家產，與之，蒙弟某獨携妻子弟妹，別下帷，都門眾徒授經，日夕諷誦，為樂，妻孥告飢，晏如也。適同門新井大年，暴病歿，其徒喪師，多歸先君門，久之，大年之嗣和卿亦歿，大年父子塋，玉人塋，玉人益苦無所就，正來請先君，當是時，幕政失敗，國論鼎沸，各藩就封，江都落英，紀綱日弛，制盜書行，加以凶饑，米珠柴桂，人不樂業，師友四散，各往所適，先君於是亦避地塋玉，再遷久喜，久喜有遷善館，為鷗翁曾遊講經之所，館址雖墟，遺愛尚存，因留而家焉。先君既卑視流俗，不媚時輩，趨舍睽違，不欲與世俯仰，棲遲衡門，囊足不復入都，以故道行於閭里，子弟不為世知，雖有遺著傳之家耳。今茲增永吉田二生，遠自滿洲寄書云，先師捐館，倏忽垂三十載，遺編久輟，篋底恐徒肥蠹魚腹，生等不禁深惜，願捐費印行，以頌同好，且永其傳，乃探故篋，獲性說疏義一篇，上下兩卷，出以授二生，噫，此先君晚節，手繕以賜紳軒先兒者，至今楮墨不變，手澤如新，對此恍登夙昔，音容宛在目前，不復似更二十餘葛矣，也。諸生弗設其舊，其亦得無感此間乎？若夫其學其識，諸生自知之，今又何說，昭和十年八月下濬男謹跋。

**性說疏義跋**

性說疏義跋文(個人藏)

「關係資料 解題」5(24頁)參照。

一 阪井弁『明治畸人伝』所収の「中島撫山」

（漢詩の部分は原漢文。同部分のみ村山吉廣氏の訓読）

中島撫山翁名は慶太郎、東都乗物町の豪商某の長男なり、其生家は乗物屋にして、江戸草創より連續せし舊家なり、町名の依つて起りしも其生家ありしが爲めなりと云ふ、翁幼より學を好み、長じて龜田鵬齋の子鸞谷<sup>1</sup>の門に入り、鵬門の驍楚<sup>2</sup>を以つて名を知らる、當時町人の權力なき殆ど暫間的舉動を以つて、常に時の幕吏及び諸侯の邸吏を饗し、御用仰付けらるゝを名譽とせり、翁性篤實にして殆ど君子の風あり、故に心に之れを愧ぢ、遂に意を決して家を其弟<sup>3</sup>に譲り、富貴を視ること土芥の如し、自ら清貧に安んじ、日夕韋籍を放たず、維新の際余<sup>4</sup>が父<sup>5</sup>横濱に在り職を税關に奉ず、偶ま翁を招いて移居せしめんとす、翁これを辭して曰く、今や海内新

たに平定すと雖も、國威日に墮つ、余復た夷狄の跋扈を視るに忍びざるなりと、のち武州久喜に退隱し、帷を下して村童を教授す、蓋し久喜の地鵬齋先生の始めて村塾を設けし縁故あるに由る、翁の夫人<sup>7</sup>亦良賈<sup>6</sup>の女也、然れ共能く其夫の意を體し、身に綿服を着け質素身を奉じ箕帚の務に服す、是れ尋常商家の女の堪ゆる所に非らず、蓋し大雅堂<sup>8</sup>の玉瀾<sup>9</sup>に於けるが如き者あり、翁始め總髮、のち結髮して今に至る今茲七十五、一見して其七八十年前の宿儒を見るが如し、翁嘗て平泉に遊び其故墟を追吊し、『平泉旅物語』の著あり、又『日文草篆考』<sup>11</sup>を著はし、神代文字の草書と楷書と同一體なることを明かにす、蓋し鸞谷の學風、漢籍折衷派に神典説を交へて、新主義を出したる者、故に翁能く其學風を今日に維持す、『日文草篆考』の總論に曰く

余日文の草跡を釋し、因て之を熟觀して、其四十七文

皆〇の一圈に出でて、〇<sup>12</sup>の一圈の萬變を盡くし、究竟また〇の一圈に歸するの理、此草文に示せるを覺ふ、（中略）是其縱横十四畫及び所生の三十六文悉く皆〇の一圈に歸せざるを得ざるを知るべし、然れば其分れて五十文となりて、日用言語を給贍するは、〇の萬變を盡す所以、同じくして一圈に歸する事〇の大本矩の一元徳を失はざる所以にして、是れ我萬民の氏々名々の職業より禽獸草木の萬物まで、詭類殊狀不可勝紀もの、皆我天御中主大神<sup>13</sup>の一神機より出で、その萬變を盡くして、天下の大用を既濟し、究竟其大神に嗣まして、現ツ神と大八洲知食す大日本根子天皇<sup>14</sup>の一根に仕へ奉り、其大政令に歸して、織塵も洩るゝ事無き、大一統の義と、符節を合せざることなし、また天地の自然と雖も豈奇靈の不可思議なる者と云はざるべけんや、因てまた漢土の聖籍を執つて之を一勘す

るに、その著之徳圓而神<sup>15</sup>と云ひ、また樂爲同<sup>16</sup>と云ふ者、此草文の一變一同不可端倪に近し、卦之徳方以智<sup>17</sup>と云ひ、禮爲異<sup>18</sup>と云ふ者、此眞文の一畫紊るべからずして、萬言萬事の區別を嚴整するに近し、即ち一陰一陽の動用にて、禮は敬肅にして義に近く、樂は雍和にして仁に近し、凡そ君臣父子夫婦の倫より朋友賓主の交まで區別益々敬して、和同流れず、和同益々親じて<sup>19</sup>、區別離れずこれ天下を以て皆大中に歸す、これ聖王仁義禮樂を以て家邦を平治するの道も精氣爲物遊魂爲變<sup>20</sup>といへる天地四時の鬼神の情狀も、允執厥中<sup>21</sup>の語も、一以貫之<sup>22</sup>の義も、この神傳<sup>23</sup>の中に觀て、簡にして能くこれを盡くせり、鶯谷先師<sup>24</sup>嘗て謂へり、神典に深からざれば、六經<sup>25</sup>終に其奥を闢ふに足らずと、これ信に然り、余が老婆心また我神傳を擧て彼士儒師に傳へんとす、俗學下士は之を笑はんこと

固よりなり、もし古昔の聖賢の如きに遇はゞ、<sup>26</sup> 吾  
 必ずその再拜して之を受け、斂衽して歎服せんこと  
 を知れり

翁亦書に巧なり、其鵬齋流を今日に能くする者蓋し翁一  
 人なるべし、今茲四月翁杖を銚子に曳く、偶之余が廬を  
 過ぐ、因ツて其書を乞ふ、翁其近詠を書して曰く

國の爲め君の爲めに寸功無く、<sup>27</sup> 將つて眠り將つて  
 喫ふ兎殫の中、<sup>28</sup> 新たに迎ふるに梅柳何れの顔面ぞ、

七十壽頑又四翁

右壬寅<sup>27</sup>春書 撫山老儒慶

送山本技師祇役於龍動<sup>28</sup>

雄々志可母、<sup>29</sup> 常夜國敵、<sup>30</sup> 蛇吳公、<sup>31</sup> 擊波良布陪吉、<sup>32</sup> 比禮  
 取爾由玖

翁又和歌を詠じ、佐致麻呂<sup>29</sup>と稱す、蓋し眞玉縣即ち幸  
 玉の義に取れるなり、翁の長男<sup>31</sup>栃木町に在りて家塾<sup>32</sup>

を設く、翁田園學を談ずるに足る者無きを歎じ、私かに  
 其學風の廢絶せんことを悲む、翁の篤學にして古君子の  
 風あるは偉と稱すべき者なり、其壯時漫遊を好むや友人  
 に語ツて武州の山水の如き我手よくこれを撫するに足ら  
 んと、由ツて撫山と號す今久喜に退隱すれども、餘日あ  
 れば必ず汗漫の遊を爲し、風詠する所ありと云ふ

【注】

1～正しくは綾瀬。安永七年生、嘉永六年没。2～正しくは  
 翹楚。3～中島家では、「堂弟」「従弟」と伝わる。4～阪井  
 弁。明治二年生、昭和二十年没。5～阪井保祐。明治三十年没。  
 清水侯に仕え、下田奉行や神奈川奉行の配下になる。明治四  
 年に横浜税関に奉ず。6～郷学遷善館。7～後妻さく（亀田  
 よし）。天保七年生、大正十二年没。8～撫山は、「須藩之世  
 家」と記す。9～池大雅。享保八年生、安永五年没。10～池  
 大雅の妻。11～原本が久喜市公文書館に現存。12～日文の楷  
 書体のウの字。13～天地開闢の際に高天原に最初に出現した  
 神。14～第七代天皇。孝靈天皇。15～出典は「易経」。16～  
 出典は「礼記」。17～出典は「易経」。智は、正しくは知。18  
 ～出典は「礼記」。19～正しくは親しんで。20～出典は「易経」。

21 出典は『中庸』。22 出典は『論語』。23 日文のこと。  
24 龜田鶯谷。文化四年生、明治十四年没。25 儒教の基本的な経典。『易経』『書経』『詩経』『春秋』『礼記』『周礼』の六つ。26 正しくは遇は。27 明治三十五年（一九〇二）。  
28 ロンドン。29 佐智麻呂・佐知麻呂ともいう。30 慶麻呂とも書くので、名から取った可能性もある。31 中島靖。嘉永五年生、明治二十九年没。32 明誼字舎のこと。

## 二 中島蹟臣撰文「中島撫山墓誌銘」

（原漢文。村山吉廣氏の訓読）

撫山ぶざん府君ふくくんの諱いなは慶けい、字あざなは伯章はくしょう、清右衛門君せいゑもんくんの長子ちやうしなり。母ははは岡本氏おかもとし。文政十二年四月十二日を以て江戸えどに生る。明治四十四年六月廿四日を以て埼玉縣さいたまけん久喜くきに歿ぼつす。越こえて廿七日、郷北ごうほくの塋域えいいきに葬ほうむる。享年八十有三。始はじめめ日永氏ひながしを娶めとるも先に歿ぼつす。後のちに龜田氏かめだしを娶めとる。七男五女。孫十四人有り。少わかきよ

り學がくを好む。龜田綾瀨かめだりょうらい、鶯谷二先生おうくせんせいに歴事れきじして講道こうどう研究けんぎょうす。六十餘年一日の如し。寿考じゆこうを已もつてす。又またた子孫しそん多し。其そのの事業じぎやうは當世とうせいに顯あはれずと雖も、其そのの道德どうとく、行誼こうぎは古いにしえ名賢めいけんに愧はぢず。泰山たいざん類れいちて梁木りやうぼく壞やぶる。諸これを土中どちゆうに誌しるす。之これを永ながからしめ護わするるなかれ。

### 【注】

1 中島良雅。弘化四年没。2 光明寺の墓所。3 「泰山類ちて梁木壞る」は、孔子が自分の死を予知して詠んだ言葉。後に、賢者の死のこともいう。

三 『史学雑誌』第三十二編第八号所収の故中島慶太郎「天平文書田税物價諸表（其二）」に付した著者略歴

故中島慶太郎氏は撫山と號す。江戸の人、中島清右衛門の長男にして、文政十二年江戸日本橋新乗物<sup>1</sup>に生る。

國學漢學を當時關宿藩の儒官龜田鶯谷<sup>2</sup>に學び、後兩國矢の倉、及び神田於玉ヶ池等に塾を開きて漢學を教授せり。

明治元年居を武藏國埼玉郡鹿實村<sup>3</sup>に移し、明治二年更に同郡喜久村<sup>4</sup>に轉居し、續いて私塾を開き子弟を教養し、明治四十三年<sup>5</sup>、八十餘歳の高齡を以て逝けり。

本論文は氏の遺稿にして氏が大日本古文書を繙讀研究して得たる所のものまゝ氏の卓見の存するを見るべし。今回回部博士の好意により、これを本誌に掲載することを得たり。

【注】

1～正しくは江東龜戸。2～正しくは龜田綾瀬。3～正しくは鹿室村。4～正しくは久喜本町。5～正しくは明治四十四年。6～東京大学名誉教授の服部宇之吉のことか。

四 中島竦編『演孔堂詩文 下巻』所収の中島竦撰文「演孔堂詩文跋文」

（原漢文。村山吉廣氏の訓読）

先君<sup>1</sup>の詩文におけるや、殊に緒餘の業のみ。平生製する所<sup>2</sup>なすと爲さずと雖も、甚だしくは意を經ず、又た甚だしくは惜しまず。稿を屬する所有れども、多く門人諸生の携へ去る所と爲り、即ち携へ去らざるも亦た先君手づから親しく覆瓿補壁し、甚だしきは則ち糊して紙褌と爲し、燃りて紙燭と爲し、否らざれば則ち臨池、漫畫して一字をも辨ぜず。故を以て明治以前の作、家に一稿も留めず。其の僅かに存する者も、皆な諸生の家より出づ。竦<sup>2</sup>年十三、始めて之れを惜しむことを知り、拾ひて之れを収め、

繕つくろひて之これを存ぞんす。故ゆえに明治めいし以後いごは、略ほぼ備そなはる。  
 竦しやうす既に長ちやうすれども、多おほく家いえに在あらざる。諸しよ弟子ていし、姪やく  
 之これを繼つぐ者ものなく、亦またた復またた過か半はんを散さん佚いす。然しかれ  
 ども先せん君くんも亦またた已すに老おいたり。儻もし作つくる所ところ有あるも、  
 碑ひ識し・墓ぼ碣けつ・應おう酬しゆうの文字もんじに過すぎざるのみ。得とく手ての處ところは、  
 此こゝに在あらざるなり。先せん君くんは一いっ生しやうを自みづから持じすること甚はな  
 だ高たかく、俗ぞくに從したがひ世よに阿おねることを肯がえんぜず。其その  
 詩し文ぶんにおけるや、亦またた猶なほ其その人ひとと爲なりのごとし。  
 簡かん勁けい峭しょう拔ぼつ、墨すみを惜おしむこと金きんの如ごとし。媚び嫵ぶを喜よろこばず、  
 尤もも平へい弱じやくを惡にくむ。大たい抵てい、詰きつ屈くつ聾そう牙が、時じ好こうに投とうぜず、  
 古こ聲せい鏗けい錚そう、知ち音いんを當とう世せいに求もとめず。肯あえては出いだして人ひとに  
 示しめさず。人ひとも亦またた困よりて識しるなし。今いまや已すで逝ゆきて  
 二に十じゆ年ねんなり。音おん容やう復ふた見みるべからず。しかして諸しよ生せい  
 仰ぎやう慕ぼの誠まことは、昔せき日じつに減げんぜず。近きん日じつ聚あり謀はかりて曰いわく、  
 「先せん生せいを思おもへども見みるべからず。先せん生せいの製つくりし所ところを見

れば、猶なほ先せん生せいを見みるがごとからん」と。竦しやうに就き  
 て來きたり請こふ。乃すなわち編へん次じする所ところを出いだして之これに示しめす。  
 諸しよ生せい大おほいに喜よろこび、皆みな刊かんして之これを頒わかち、傳つたへて之こ  
 れを永ながからしめんことを願ねがふ。急きゆうに一いっ通つうを繕つくろひて以もつ  
 て之これに與あたへ、其それを手しゆ民みんに付ふせしむ。亦また其その傳つた  
 はらざるを惜おしむ所以ゆえんなり。

【注】

1～中島撫山。2～中島竦之助。文久元年生、昭和十五年没。

五 故中島撫山著『性説疏義 下冊』所収の  
 中島竦撰文「性説疏義跋文」

（原漢文。村山吉廣氏の訓読）

先君<sup>一</sup>は江戸の人なり。鵬翁歿後三年にして生る。生れて十四年、綾瀬先生に質調す。親炙すること十二年、先生逝く。其の未だ逝かず老いて疾むや、令嗣鶯谷先生に従ひて遊ぶ。先生は家學を祖述し、尤も精を性説に注ぐ。博覽洽聞、讀まざる攸なし。曾て『論孟集注異説』『學庸章句異説』を著す。亡慮三四十卷なるも一旦翻然として之を改めて曰く、「韓愈氏に言有り。『古を汲むには脩綆を得、古を稽ふるの道は、宜しく井を汲むがごとく然り。唯だ綆の脩からざるを患ひて、井の淺からざるを患へず』と。盡く著す所を棄て、一に古義に歸す」と。先君其の説を飫聞し、久しく世味を忘れ、遂に家産を推して之れを堂弟某に與へ、獨り妻子弟妹を携へて、別に帷を都門に下し、徒を聚めて經を授け、日夕調籀して楽しみと爲し、妻孥飢うるを告ぐるも

晏如たり。適ま同門の新井大年<sup>二</sup>暴かに病歿し、其の徒、師を喪ひ、多く先君の門に歸す。之れを久しうして、大年の嗣、和卿<sup>三</sup>も亦た歿す。大年父子は埼玉の人なり。埼玉の人、益ます正に就く所無きに苦しみ、來りて先君に請ふ。是の時に當り、幕政駁を失ひ、國論鼎沸し、各藩封に就き、江都落莫たり。紀綱日に弛び、剽盜畫行す。加ふるに凶饑を以てす。米は珠のごとく、柴は桂のごとく、人、業を樂します。師友四散し各おの適する所に往く。先君是において亦た地を埼玉に避け、再び久喜に遷る。久喜に遷善館有り。鵬翁曾て遊び經を講ぜし所のなり。館址墟なりと雖も、遺愛尚ほ存す。因りて留まりて焉に家す。先君既に流俗を卑視し、時輩に媚びず。趨舍睽違するも、世と俯仰するを欲せず。衡門に棲遲し、足を裹みて復た都に入らず。故道を以て

閨里の子弟に行ひ、世知を爲さず。遺著有りと雖も、之れを家に傳ふるのみ。今茲、増永、吉田の二生、遠く滿洲より書を寄せて云く、「先師館を捐て、倏忽として三十載に垂とす。遺編久しく篋底に韞め、徒らに蠹魚の腹を肥やすのみなるを恐る。生等深く惜しむを禁ぜず。貲を捐てて印行し、以て同好に頌ち、且に其の傳を永くせんことを願ふ」と。乃ち故篋を探り、性説疏義一篇、上下兩卷を獲、出して以て二生に授く。噫此れ先君の晩節、手づから繕ひて以て綽軒先兄に賜ひしものなり。今に至るも楮墨變はらず、手澤新たなるが如し。此れに對して恍として夙昔の音容宛として目前に在るを覺ゆ。復た二十餘の葛裘を更めたるに似ざるなり。諸生も其の舊を護れず。其れ亦た此の間に感無きを得んや。夫れ其の學其の識のごときは、諸生自ら之れを知る。今又

た何をか説かんや。

【注】

- 1 中島撫山。2 新井稻亭。文政六年没。3 新井桐蔭。文政十三年または天保元年生、慶応二年没。4 増永茂十郎（茂重郎ともいふ）。明治十六年生。滿鉄参事、社長室監察役。5 吉田忠太郎。明治十七年生。明倫館第一期卒業生。二元言揚学舎助教。滿洲国國務院軍政部囑託。6 中島靖。

六 中島竦作製『撫山中島先生略年譜』

（原文は説点なし。参考のために付す。）

文政十二年丑。四月十二日先生「江東龜戸ノ大祖父隱宅二生ル。是ヨリ前二月江戸大火。新乗物町ノ本宅モ亦災二罹ル。新築未タ成ラス。故二此二在リテ生レタリ。天保十年己。十一月母岡本氏ノ逝フ。先生時二年十一。

十三年寅。年十四。初メテ贅ヲ龜田先生ノ門ニ執ル。綾

門出井貞順ノ勸ニ由レル也。初岡本氏逝テ繼室出井氏來

ル。貞順ノ姉也。故ニ先生始句讀ヲ貞順ニ受ク。貞順之

ヲ器トシ乃龜田先生ノ門ニ薦ム。時ニ綾先生、六十五。

鶯先生、三十六。貞順名八寅。字八炳文。醫生ナリ。後

出井氏室ニ安ンセスシテ去ルモ先生ノ貞順ニ於ケル其交

リ依然タリ。

弘化二年乙巳。年十七。元服ヲ加フ。鶯先生爲ニ字シテ伯

章トイフ。

四年丁。十月二日父良雅君逝ク。先生時二年十九。是

ヨリ親シク家務ヲ視ル。俗事煩瑣。然レトモ學問モ亦廢

セス。是歲答馬場君書アリ。友人ノ期待セシ所知ルヘ

キ也。馬場君名八弘。其字號ヲ失フ。先生ト親友ナリ。

學經堂文集、ハ此人ノ原輯ニ係ル。

嘉永六年癸。年廿五。四月十四日綾先生卒ス。是ヨリ專

ラ鶯先生ニ師事ス。

安政四年丁。年廿九。祖父勇哲君逝ク。是ヨリ前先生頗

ル俗務ヲ厭フ。然レトモ大父母在スヲ以テ勉強シテ事ニ

從フ。是ニ至リテ自カラ禁スルコト能ハス。秋間飄然出

テ、武毛ノ間ニ遊ヒ姻戚留ムレトモ止マラザルナリ。樂

托日記アリ。是行ヲ記セル也。去年八月大風龜戸ノ隱

宅壞ル。既ニ家ニ歸リ遂ニ壞餘ノ屋材ヲ收拾シ室ヲ西國

矢ノ倉ニ築キ盡ク家産ヲ推シテ從弟某ニ與ヘ十二月妻子

弟妹ヲ率テ矢ノ倉ニ遷居ス。出井氏ト相近シ。貞順甚夕

歡ビ日ニ相往來ス。蓋其鑑識謬ラサルヲ以テナリ。

五年戊。年三十。正月十三日開講。自後此ヲ以テ例ト爲

ス。演孔堂ト號ス。鶯先生來リ莅ム。此春又修築ス。小

築三首アリ。七月友人千葉得一。ト偕ニ鶯先生ニ從ヒ上

毛草津ニ遊フ。是歲虎列拉病大ニ流行ス。歸テ王子驛ニ

至リテ始メテ之ヲ知ルト云フ。

六年<sup>未</sup>。八月新井大年歿ス。大年八埼玉郡鹿室ノ人。名八豊。字八大年。稻亭居士ト號シ塾ヲ神田阿玉ケ池ニ開ク。綾門ノ先輩也。故ニ先生交ヲ大年父子ニ訂スルコト久シ。是ニ至リテ其門人俄ニ師ヲ失ヒ據ル所無キニ苦シム。因テ先生ヲ推シテ其舊塾ニ主ヲラシム。是ニ於テ神田阿玉ケ池ニ移ル。

萬延元年<sup>申</sup>。年卅一<sup>10</sup>。夏秋間脚疾ヲ患フ。灸治數十日既ニ癒エテ復タ病マズ。初先生幼ニシテ多病。漸ク長シテ漸ク健ニ。是ヨリ以後殆ト病無シ。恒ニ言フ。人齡三十ヲ過クレバ以テ病ヲ免ルベシト。

文久元年<sup>酉</sup>。年卅三。大年遺愛ノ碑成ル。其篆額八堀長門守直虎ノ署スル所。其實ハ先生ノ捉刀ニ係ル。直虎ハ信州須坂ノ藩主。明治ノ初<sup>11</sup>徳川將軍慶喜ヲ諫メ屠腹シテ死セシ者。良山公ト諡ス。其實介弟タリシ時鶯先生ノ門ニ遊フ。是ヨリ先既ニ藩主タリ。來リ學フコト能ハス。

特ニ鶯先生ヲ屈シテ講筵ヲ其邸ニ開カシム。藩邸八丁堀ニ在リ。鶯先生屢々蒞ムコト能ハス。大抵先生ヲシテ代テ之ニ赴カシム。一月數次常ニ以テ例ト爲ス。是ニ由リテ須阪藩臣中ニ先生ヲ知ル者多シ。

三年<sup>亥</sup>。年卅五。閣老久世大和守<sup>12</sup>幕府ヨリ塾居ノ命ヲ受ク。鶯先生モ亦頗ル告退ノ志アリ。十二月鶯先生先生ヲシテ關宿ニ赴キ其藩學教倫館ニ代講セシム。藩主<sup>13</sup>ニ謁ス。藩主初テ立テ年僅ニ十四五。初旬ニ往キ下旬ニ歸ル。稻葉生從フ。是ヨリ關藩士人往々來リ學ブ。

慶應二年<sup>寅</sup>。年卅八。七月新井和郷<sup>14</sup>歿ス。和郷八大年ノ子。先生ヨリ少キコト一歲。先生ニ兄事ス。故ニ其弟子等遺訓ヲ奉シ亦前例ニ倣ハンコトヲ請フ。先生是ニ於テ時ニ近ニ就テ大場村大垣氏ニ赴講ス。大垣氏<sup>15</sup>ハ和郷ノ姻戚ニシテ又其弟子タリ。關藩ノ士モ亦或ハ遠ク來リテ講ヲ聽ク。

三年卯。年卅九。是時二當リテ徳川氏政衰へ海内騷擾。

都下モ亦事無キヲ保セズ。六兒<sup>16</sup>皆幼ニシテ一兒<sup>17</sup>懐胎

ノ内ニ在リ。先生常ニ後顧ノ患無キコト能ハズ。故ニ冬

間暫ク大場ノ講筵ヲ停メントトヲ欲ス。而ルニ諸弟子皆

之ヲ欲セズ。切ニ請テ止マズ。是ニ於テ悉ク家眷ヲ携テ

暫ク大垣氏ニ寓ス。

明治元年<sup>辰</sup>。年四十。三月江戸ニ歸ル。是歲徳川氏大政

ヲ奉還シ各藩國ニ就ク。夏間鶯先生モ亦都下ヲ去リテ關

宿ニ移リ諸子皆分散シ市場公謙ハ常ニ歸リ堀内伯教ハ信

ニ歸リ大關公柔ハ南總ニ赴ク。冬初先生モ亦出テ、鹿室

ニ寓ス。和郷ノ舊館ニ因レルナリ。

二年<sup>巳</sup>。年四十一。正月鶯先生關藩ニ在テ圍禁ノ厄ニ遭

フ。先生百方營救八月禁解ク。十二月久喜ニ遷ル。是歲

喜連川ノ行アリ。加藤生從フ。

四年<sup>辛</sup>。八月栃木ノ行アリ。落合生從フ。冬間移居。

五年<sup>壬</sup>。戸籍令ノ頒布アリ。是ニ於テ遂ニ籍ヲ久喜ニ編

ム。

六年<sup>癸</sup>。學制改革。私塾ヲ廢シテ學校ヲ設ケラル。一月

埼玉縣第九區ニ始テ一校ヲ開ク<sup>18</sup>。先生門人ヲ率テ之ニ

蒞ム。四月罷ム。八月神道教導少講義ニ補セラル。因テ

私宅ニ於テ幸魂教舎ヲ開ク。是歲書風ヲ一變シ楷法ヲ棄

テ、<sup>19</sup>體ヲ取ル。

七年<sup>甲</sup>。三月權中講義ニ補セラル。七月堀内伯教翊贊教

憲議一篇ヲ教部省ニ呈ス。議ハ先生ノ潤色スル所ナリ。

是歲春間筑波ノ行アリ。内田生從フ。蓋シ先生母ノ姉老

テ土浦ニ在リ。往テ之ヲ訪ヘルナリ。秋間又栃木ノ行ア

リ。勿堂先生<sup>19</sup>從ヘリ。鞍掛山ニ遊フ。

八年<sup>乙</sup>。堀内伯教久ク疾テ東京ニ在リ。先生往テ病ヲ視

東京ニ在ルコト多シ。八月伯教逝ク。冬間信中ノ行アリ。

内田生又從ヘリ。伯教ノ家事ニ因レルナリ。十一月鶯先

生ノ令嗣諱吉君モ亦逝ク。是時ニ當リ鶯先生老テ季子<sup>20</sup>未タ冠セズ。是ヨリ先生大抵一兩月中必一上京シテ先生ノ學事ヲ助ク。

九年丙。學生益多シ。夏間屋後ニ二室ヲ築ク。秋間又栃木ノ行アリ。江原生從フ。出流山ノ奇ヲ探ル。

十年丁。秋冬間瘧ヲ患ヒ癒エサルコト五十餘日。是ヨリ前疾マサルコト殆二十年。此ニ至リテ始テ是疾アリ。

十二年卯。年五十一。四月杉陰先生<sup>21</sup>ト共ニ信中ニ遊ブ。勿堂先生從フ。七月歸ル。丁巳以來久シク遠遊セズ。遠遊スト雖月ヲ踰ルコトナシ。是後往々一月ヲ踰ユ。

蓋諸令兒ノ漸ク長セシヲ以テナリトイフ。

十三年庚。一月綽軒先生<sup>22</sup>始テ明誼學舎ヲ栃木ニ開ク。

八月先生又杉陰先生ト偕ニ下毛ニ遊ヒ山口大作諸人ト共ニ日光山ニ登リ遂ニ足利ニ遊ヒ聖廟<sup>23</sup>ノ聖像藏書ヲ觀ル。

十四年巳。八月鶯先生疾アリ。先生之ヲ聞テ奔テ之ヲ視ントス。夜中報アリ。鶯先生今朝既ニ卒スト。乃チ急ニ奔リテ之ニ赴ク。

十五年午。五月叔姑ヲ奉シテ又日光ニ遊フ。先生八九歲ノ時大父母ニ從ヒ偕ニ日光ニ遊フ。是ニ至リテ五十餘年。叔姑先生ニ長スルコト僅ニ二三歲。故ニ其舊遊ヲ憶テ偕ニ行カンコトヲ願ヘルナリ。

十六年未。夏間常陸ニ遊ヒ霞浦ヲ渡リ市場公謙ヲ麻生ニ訪フ。高木生從ヘリ。八月栃木ニ遊ヒ綽軒先生ヲ携テ偕ニ古峯<sup>24</sup>石裂<sup>25</sup>ノ險ヲ探ル。

十七年申。秋間常ノ筑波郡神村ニ赴キ鵬先生<sup>26</sup>ノ稻垣君碑ヲ打ツ。高木生從ヘリ。

十八年酉。秋間下毛水代ノ神幟ヲ書シ遂ニ栃木ニ至リテ戸奈良村石井氏ヲ訪ヒ唐澤山ニ登ル。縛君<sup>27</sup>從ヘリ。七月東北鐵路布設。宇都宮ニ至ル。往來靈便此ヨリ栃木ニ

遊フコト大抵年二二兩度。事無キ者必シモ記セズ。是歲日支<sup>28</sup>草篆考成ル。

十九年丙。秋間上毛二遊ヒ天田氏二寓シ偕ニ往テ三波川ノ美石ヲ觀更ニ國分寺故墟ヲ尋ヌ。

二十年丁。秋冬間又上毛二遊ヒ赤城山ヲ踰テ沼田ニ至リ追貝温泉ニ浴シテ歸ル。

二十一年戊。年六十。十二月高田君成逝ク。君成名八俊貞。春汀ト號ス。栃木ノ人。亦綾門ニシテ先生ト最モ親シ。

先生ノ屢栃木ニ遊ヒシ者ハ多ク此人アルカ爲ナリ。是歲三先生傳實私記<sup>29</sup>ヲ作ル。

二十二年己。是ヨリ前千葉大巖<sup>30</sup>ト約アリ。屢々松島ニ遊ハンコトヲ思テ果サズ。是ニ於テ五月大住天田一氏ヲ誘テ共ニ松島ニ遊ヒ遂ニ赤生津ニ天巖ヲ訪フ。天巖八同門ノ後輩。得一。其田氏<sup>31</sup>。赤生津ノ人。相携テ陸中ノ尊寺達谷窟ヲ觀歸途多賀城國分寺舊址ヲ訪テ還ル。秋

間又南總木更津ニ遊ヒ又國分寺總社ノ舊墟ヲ尋ヌ。

二十三年庚。夏秋間多ク栃木ニ在リ。

二十四年辛。一月廿九日胞妹榎田刀自<sup>32</sup>逝ク。先生夙ク母ヲ喪ヒ弟妹アリト雖同出ニ非ズ。同出唯此人アルノミ。其痛知ルベキナリ。

二十五年壬。六月南總九十九里濱海ニ遊ブ。

二十八年乙。秋冬間信越ニ遊ヒ歸テ上毛ニ遊ヒ金洞山ニ登ル。

二十九年丙。春間房ノ勝山ニ遊ヒ洲崎ニ至ル。卅年丁。秋間常ノ井關ニ遊ブ。

卅一年戊。年七十。是ヨリ前未タ曾テ老ヲ稱セズ。是ニ至リテ自カラ私印ヲ刻シテ七十曰老ト曰ヒ爾後年々之ヲ用卅別ニ小印ヲ刻シテ以テ年ヲ紀シ七十以上ノ證ト爲ス。四月諸弟子等壽筵ヲ開テ之ヲ祝ス。卅二年己。八月下毛ノ川治温泉ニ遊浴ス。既ニ歸テ栃木

二至ル。適々綽軒先生糖尿症ヲ患ヒ稍劇シ少ク癒テ始テ  
歸ル。

卅三年<sup>庚</sup>。秋間栃木ニ遊ブ。圖ラザリキ暈眩嘔吐ノ症ヲ  
得臥スコト數日。是ヨリ往々此症ヲ患フ。

卅六年<sup>癸</sup>。五月性説疏義成ル。六月癩ヲ患フ。是歲中央  
線鐵路開ク。七月甲ノ御嶽ニ遊ブ。野原生從フ。

卅八年<sup>乙</sup>。四月病ニ臥ス。稍々劇ナリ。既ニ癒エテ常ノ  
平磯ニ遊ブ。

卅九年<sup>丙</sup>。五月杉陰先生逝キ六月綽軒先生逝キ女婿塚本  
生<sup>33</sup>モ亦久ク肺ヲ患テ床ニ在リ。家人其心ヲ傷ランコト  
ヲ慮リ八月奉シテ信越間ニ遊ヒ赤倉温泉ニ浴ス。發程ノ

翌日塚本生<sup>33</sup>ニ起タズ。  
四十年<sup>丁</sup>。八月相ノ横須賀ニ遊ブ。

四十一年<sup>申</sup>。年八十。  
四十二年<sup>酉</sup>。秋間本町ヨリ新町ニ移ル。

四十三年<sup>戌</sup>。夏間伊勢大廟ヲ拜シ<sup>34</sup>近畿諸方ヲ遊覽ス。

江原生從ヘリ。八月淫雨大水至ル。室ヲ淹スコト四五尺。  
七日ニシテ始テ退ク。冬間栃木ニ赴キ今泉ノ神幟ヲ書ス。

先生一世神幟ヲ書スル者多シ。此ヲ末次トス。  
四十四年<sup>亥</sup>。六月病ムコト僅二十餘日。是月廿四日溘焉

トシテ逝ク。享年八十有三。

【注】

- 1 中島撫山。2 とよ（登念）。天保十年没。3 龜田綾瀨。4 龜田鷲谷。5 清右衛門ともいう。6 荅馬場生書ともいう。7 原本は久喜市公文書館所蔵。四冊。8 原本は久喜市公文書館所蔵。鷲宮町教育委員会調査報告書第二集参照。9 正しくは得一。号は天巖。以下同じ。10 正しくは卅二。11 正しくは慶応四年。12 久世広周。文政二年生、元治元年没。13 久世広文。嘉永六年生、明治三十二年没。14 正しくは和卿。号は桐蔭。以下同じ。15 大垣六郎左衛門。号は致遠。16 靖次郎、婦美、端蔵、竦之助、若之助、美都の四男二女。17 後の開蔵。18 久喜学校。19 次男中

島端蔵。安政六年生、昭和五年没。20～後の亀田雲鵬。安政五年生、昭和十七年没。21～異母弟中島杉陰。弘化二年生、明治三十九年没。22～長男中島靖次郎（明治十九年に靖と改名す）。23～足利学校。24～古峰ヶ原。25～石裂山。26～亀田鵬斎。宝暦二年生、文政九年没。27～六男中島田人。明治七年生、昭和二十年没。28～正しくは日文。29～写本が久喜市公文書館に現存。30～注9と同一人物。31～正しくは、名は得一、字は其由。32～うた（宇多）。天保二年生、明治二十四年没。33～四女うら（有楽）の夫。

## 七 中島田人撰文「撫山中島先生終焉之地」碑

（原漢文。村山吉廣氏の訓読）

先君の諱は慶、字は伯章、撫山と號す。文政十二年四月二日「を以て江戸の龜戸に生る。年甫めて十四、初め贄を龜田先生の門に執り、綾瀬、鶯谷兩先生に師事す。學既に成り、塾を兩國の矢倉に開き、演孔堂と號す。後

に居を神田阿玉池に移す。明治維新の際、都下を去りて武の埼玉郡鹿室に寓す。何も無くして居を同郡久喜に卜し、幸魂教舎を開き、郷黨の子弟に教授す。爾來四十餘年、門に及び者千數百人なり。明治四十四年六月二十四日家に歿す。壽八十三なり。先君の學を講ずるや、皇道を以て主と爲し、之れを助くるに六經仁義の教を以てす。曰く、皇國性神の大道は、獨り漢土の聖人の傳ふる所の六經仁義の名教と克く之れに協ふ」と。是れ先君の學の他の所謂る漢學者流と大いに逕庭有る所以なり。今や先君世に即きて茲に卅年なり。しかれども門人諸生の景慕の念、昔日に減せず。是において相謀りて石を家の一隅に建て、刻して「撫山中島先生終焉之地」と曰ひ、以て永く諸れを後昆に傳へんと欲す。嗚呼、師道の振るはざるの曰、諸生の先君におけるや、其の志、洵に美にして且つ異なりと謂ふべし。

【注】  
 1 正しくは十二日。2 正しくは久喜本町。3 国学。4  
 儒教。孔子の教え。5 かなながらの道。神道。6 久喜  
 新町の家。7 師弟の正しい在り方。師につく道。

八 『書苑』第六卷第四号所収の中島慶著・  
 中島竦増訂「増訂龜田三先生傳實私記(其一)」  
 に付した著者略歴

中島慶字八伯章、撫山ト號ス、文政十二年四月十二日江  
 戸ニ生ル。年甫メテ十四、贅ヲ龜田先生ノ門ニ執リ、綾  
 瀬、鶯谷兩先生ニ師事ス。學既ニ成ルヤ、初メ塾ヲ兩國  
 矢ノ倉ニ開キ、演孔堂ト號ス、後神田お玉ケ池ニ移ル。  
 明治維新ノ際、都下ヲ去リ武州埼玉ノ久喜ニ下居シ幸魂  
 教會<sup>1</sup>ヲ設ケ、郷黨ノ子弟ヲ教授ス。ソハ其昔久喜ニ遷

善ト稱スル學校アリ、而シテ其館記ノ碑文ハ、鵬齋先生  
 ノ撰ニ係リ、且先生親ヲ經ヲ講ゼシコトモアリトイフ緣  
 故ニ由レルナリ。爾來四十餘年、及門者千數百人。明治  
 四十四年四月<sup>2</sup>二十四日歿ス。享年八十三。遺著ニハ演  
 孔堂詩文、性說疏義等アリ。明治ノ末年ニ在リテハ、鵬  
 齋先生ノ學統ヲ承フルモノトシテハ、雲鵬先生<sup>3</sup>以外ニ  
 於テハ、唯一ノ長老タリシ人ナリ。

【注】  
 1 正しくは幸魂教會。2 正しくは六月。3 龜田雲鵬。

- 1977 村山吉廣「中島敦とその家学－鵬斎門流の中島撫山－」（『中国古典研究』第22号所収）
- 1978 久喜市・鷺宮町両教育委員会合同調査報告書第1集『撫山中島家蔵書目録』
- 1978 中村光夫・氷上英廣・郡司勝義編『中島敦研究』（筑摩書房）
- 1981 田鍋幸信『写真資料 中島敦』（創林社）
- 1982 村山吉廣「中島敦とその家学(続)－祖父撫山及び三人の伯父－」（『中国古典研究』第27号所収）
- 1983 鷺宮町教育委員会調査報告書第2集『中島撫山小伝（附）楽托日記・関係資料三種訳注』
- 1984 倉田信靖・橋本榮治『井上金峨・亀田鵬斎』（明德出版社）
- 1984 村山吉廣「『匪今斯今 振古如茲』（中島撫山書）の幟」（『詩経研究』第9号所収）
- 1985 村山吉廣「中島撫山の『幸魂教舎』（『新しい漢文教育』第1号所収）
- 1987 村山吉廣「中島撫山の生涯」（『中島敦の会会報』第9号所収）
- 1992 村山吉廣「中島撫山」（『埼玉自治』1月号所収）
- 1992 村山吉廣「中島敦 家系・教養－『家学』を中心に」（『昭和の作家のクロノトポス 中島敦』（双文社出版）所収）
- 1996 久喜市公文書館第4回企画展展示図録『中島敦とその家系』
- 1997 齋藤勝『中島敦書誌』（和泉書院）
- 1997 村山吉廣「中島撫山碑文二種解題」（『中国古典研究』第42号所収）
- 1998 藤井明「加須市及びその周辺に散見する中島撫山の碑文の解説（一）」（『埼玉短期大学研究紀要』第7号所収）
- 1998 久喜市公文書館第8回企画展展示図録『中島撫山の生涯』
- 1998 村山吉廣「中島撫山『武田翁碑』訳注」（『中国古典研究』第43号所収）
- 1999 藤井明「加須市及びその周辺に散見する中島撫山の碑文の解説（二）」（『埼玉短期大学研究紀要』第8号所収）
- 1999 村山吉廣「漢学者はいかに生きたか－近代日本と漢学－」（大修館書店）
- 2000 平成12年久喜市文化財調査報告書（ふるさと文化のみちづくり事業－久喜市の教育－）『中島撫山関係調査報告書（Ⅰ）』
- 2000 藤井明「加須市及びその周辺に散見する中島撫山の碑文の解説（三）」（『埼玉短期大学研究紀要』第9号所収）
- 2001 藤井明「加須市及びその周辺に散見する中島撫山の碑文の解説（四）」（『埼玉短期大学研究紀要』第10号所収）
- 2002 藤井明「加須市及びその周辺に散見する中島撫山の碑文の解説（五）」（『埼玉短期大学研究紀要』第11号所収）
- 2002 村山吉廣『評伝・中島敦－家学からの視点』（中央公論新社）
- 2003 藤井明「加須市及びその周辺に散見する中島撫山の碑文の解説」（『埼玉短期大学研究紀要』第12号所収）
- 2004 藤井明「加須市及びその周辺に散見する中島撫山の碑文の解説」（『埼玉短期大学研究紀要』第13号所収）
- 2011 石井昇「中島撫山に関する一考察(上)」（『埼玉史談』第58巻第3号所収）
- 2011 久喜市立郷土資料館第2回特別展展示図録『中島撫山没後100年展』
- 2012 石井昇「中島撫山に関する一考察(下)」（『埼玉史談』第58巻第4号所収）
- 2012 村山吉廣・関根茂世『玉振道人詩存』（明德出版社）
- 2013 白岡市教育委員会『中島撫山と白岡』

## 中島撫山先生三十年祭 (鷲宮神社蔵)

中島撫山は神道式の葬儀を行い、墓も神道式で、死後御霊祭が行われる。この写真は、弟子たちが企画して石碑を建てた30年祭の時のもの。



歴史資料でよむ久喜市ゆかりの人物ブックレット ①

### 中島撫山の生涯

発行日 平成29年3月30日  
監修者 村山吉廣 (むらやま よしひろ)  
編集 久喜市教育委員会文化財保護課  
発行 久喜市教育委員会  
〒346-0192 久喜市菖蒲町新堀38  
印刷 有限会社イノウ印刷  
〒346-0005 久喜市本町2-2-21

裏表紙

### 小川一真撮影の囲碁を打つ中島撫山 (中島桓氏蔵)

中島家共通の趣味として、囲碁と園芸とがある。小川一真は、現在の行田市出身で、日本の写真文化の発展に多大な貢献をもたらした人物。

